

『ヒトラーの原爆開発を阻止せよ！』

“冬の要塞” ヴェモルク重水工場破壊工作』

ニール・バスコム著 西川美樹訳

原注

略語／略称

TNA：イギリス国立公文書館、イギリス、キュー

NA：アメリカ国立公文書館、メリーランド州カレッジパーク

NB：ニールス・ボーア図書館・アーカイブス、メリーランド州カレッジパーク

NHM：ノルウェー・レジスタンス博物館、オスロ

VM：ノルウェー産業労働者博物館、リューカン

DORA：ライフ・トロンスター・アーカイブ、ノルウェー科学技術大学(NTNU)、ドーラ図書館、トロンハイム

Barch-MA：ドイツ連邦公文書館軍事記録局、フライブルク

KA：ダン・カーズマン文書、ハワード・ゴットリーブ資料研究センター、ボストン大学

IWM：帝国戦争博物館

DIA：デイヴィッド・アーヴィング文書、ドイツ原子爆弾、ブリティッシュ・オンライン・アーカイブス

LTP：ライフ・トロンスター文書、ライフ・トロンスター・ジュニア提供

LTD：ライフ・トロンスターの日記、ライフ・トロンスター文書、ライフ・トロンスター・ジュニア提供

ESP：アイナル・シンナルラン文書、シンナルランの家族提供

ESD：アイナル・シンナルランの日記、シンナルランの家族提供

ルンネバルク・インタビュー、**モーラン**：アルフィン・モーランによるヨアキム・ルンネバルグへのインタビュー、NHM

ポウルソン・レポート：イエンス・ポウルソン「スワローによる先遣隊の活動についての報告書」、NHM: Box 25

ハウグラン・レポート：クヌート・ハウグラン「グラウス隊における無線通信」NHM: SOE, Box 23

ルンネバルグ・レポート：ヨアキム・ルンネバルグ「ガンナーサイド作戦報告書」NHM: FOIV, Box D17

スールリー回想録：ロルフ・スールリー、未発表の回想録、スールリーの家族提供

ブルン・レポート：ヨーマル・ブルン「Zとの仕事から受けた諸々の印象」1942年11月30日付、TNA: HS 8/955/DISR

プロローグ

p.6 山肌をジグザグに：Draft BBC Talk by Lieutenant Rønneberg, TNA: HS 7/181;

- Haukelid, 105–8; Rostøl and Amdal, 86; ルンネバルグ・レポート; Lunde, 99–101; Gallagher, 96–97.
- p.7 峡谷をはさんで : Report: Vemork Power Station and Electrolysis Plant, October 30, 1942, TNA:DEFE 2/219; Adamson and Klem, 138; Draft BBC Talk by Lieutenant Rønneberg, TNA:HS 7/181.
道路脇に立ち : ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31; Berg, 128; ポウルソンへのインタビュー, IWM: Oral History 27189.
- p.8 「ロンドンをあらかた」 : ポウルソンへのインタビュー, IWM: 26625; Myklebust, 108.
- p.9 「彼方に散った」 : 著者によるラグナル・ウルスタインへのインタビュー.
そのころイギリスでは : Speech at the Imperial War Museum, 1978, DORA: L-0001.

第1章 特別な水

- p.12 一九四〇年二月一四日 : Biographical Note, Papiers de Jacques Allier. Archives Nationales, Paris; Goldsmith, 84–88.
- p.13 その要求量が : Letter from Rjukan, Vedr. Tungt Vann, January 11, 1940, VM: Box 4F-D17-98; Norsk Hydro Heavy Water Discussion with Bjarne Eriksen, May 24, 1945, TNA: CAB 126/171.
- p.14 これで愛読する : Top Secret Report by J.C.W., March 6, 1946, TNA: CAB 126/171.
「フレスという名で」 : Goldsmith, 86.
- p.15 オスロ西方の : Norsk Hydro, Promotional Pamphlet, TNA: DEFE 2/221.
この水の流れが : Vemork Power Station and Electrolysis Plant, NHM: FOIV, Box 78; Norsk Hydro Report, September 14, 1942, TNA: HS 2/184.
- p.16 一九三一年にアメリカの化学者 : Rhodes, 270 (リチャード・ローズ『原子爆弾の誕生』上下巻, 神沼二真・渋谷泰一訳, 紀伊國屋書店); Brun, 9; Report by D. R. Augood, December, 1954, VM: JBrun, Box 17.
- p.17 「普通の水を」 : Per Dahl, *Heavy Water*, 41.
一九三三年、ノルウェーの : P. M. fra konferanse i Trondheim julen 1933, VM: Box 4F-D17-99; Brun, 10–13.
「まずは技術が先」 : 著者によるトロンスターの家族へのインタビュー.
初期のころに : Brun, 14–20 ; “Interrogation of G. Syverstad,” TNA: HS 2/188; Per Dahl, *Heavy Water*, 41–48.
- p.19 たしかに、ある研究では : Njølstad, 60–61, 77–79; Brun, 9.
一九三五年の一月に : Olsen, 399; Advertisement for “Schweres Wasser,” VM: JBrun, Box 2.
一九三九年六月 : Brun, 15.
- p.20 「原子と真空」 : Rhodes, 29 (『原子爆弾の誕生』)
「適当な起爆剤が」 : Ibid., 44.
そしてついに一九三二年 : Interview with Dr. Alan Morton, IWM: 26662; Per Dahl, *Heavy Water*, 62; Bertrand Goldschmidt, “The Supplies of Norwegian Heavy Water

- to France and the Early Development of Atomic Energy,” in Ole Grimnes, “The Allied Heavy Water Operations at Rjukan,” (IFS Info, 1995).
- p.21 一九三八年一二月：Rhodes, 251–54(『原子爆弾の誕生』)
デンマークの理論物理学者：Ibid., 256–60.
- p.22 ある物理学者の計算によれば：Karlsch, 32.
- p.23 「このくらいの小さな爆弾」：Rhodes, 275 (『原子爆弾の誕生』)
オーストリアを併合し：Hargreaves, 11; Shirer, *The Rise and Fall of the Third Reich*, 599 (ウィリアム・L・シャイラー『第三帝国の興亡』全5巻, 松浦倫訳, 東京創元社)
- p.24 「これはダンツィヒ」：Langworth, 270.
「爆弾の件だ」：Karlsch, 34.
三四歳のディープナーは：“Notes on Captured German Reports on Nuclear Physics,” TNA: AB 1/356; Bagge and Diebner, 157; Karlsch, 32.
- p.25 「たわごと」：Bagge and Diebner, 21.
九月半ばのその日：Ibid., 23; Powers, 15 (トマス・パワーズ『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか——連合国が最も恐れた男・天才ハイゼンベルクの闘い』上下巻, 鈴木主税訳, 福武文庫)
- p.26 「ひょっとしたら現在使用されている」：ハルテックが帝国戦争省に宛てた 1939 年 4 月 24 日付の書簡, Papers of Paul Harteck, Rensselaer Institute.
それとは反対に：ハイゼンベルクへのインタビュー, DIA: DJ 31.
「ほんのわずかでも見込みが」：Bagge and Diebner, 23; Powers, 16(『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか』)
- p.27 それから一〇日後の：Powers, 14(『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか』)
- p.28 ハイゼンベルクはこの理論の：Heisenberg Report, “Die Möglichkeiten der technischen Energiegewinnung aus der Uranspaltung,” NB: G-39 (German Reports on Atomic Energy); Cassidy, 422 (デヴィッド・C・キャシディ『不確定性——ハイゼンベルクの科学と生涯』伊藤憲二ほか訳, 白揚社); ハイゼンベルクへのインタビュー, DIA: DJ 31; Per Dahl, *Heavy Water*, 52–54.
「いま現在ある最強の」：Heisenberg Report, NB: G-39.
減速材に関していえば：Ibid.; Cassidy, 422 (『不確定性』)
- p.29 ウラン・クラブでの手腕を：Interview with C. F. von Weizsäcker, Oral History, NB; Rosbaud Report, NB: Goudsmit Papers, III, B27, F42.
年の瀬までに：Schaaf, 108 ; ハイゼンベルクがハルテックに宛てた 1939 年 1 月 18 日付の書簡, DIA: DJ 29; Letter to Rjukan Saltpeterfabriker, January 11, 1940, VM: Box 4F-D17-98; ハルテックがハイゼンベルクに宛てた 1940 年 1 月 15 日付の書簡, DIA: DJ 29; Walker, *German National Socialism*, 18–27.
- p.30 一九四〇年の一月には：Olsen, 399–400.
- p.31 一九四〇年三月五日：Letter from Jomar Brun to Erik Lunde, October 28, 1968, VM: JBrun, Box 4; Brun, 16–18.
重水調達の：Goldsmith, 87.
三月九日：Letter from Jomar Brun to Erik Lunde, October 28, 1968, VM: JBrun,

Box 4; Per Dahl, *Heavy Water*, 108.

- p.32 さて、次はこれをどうやって : Goldsmith, 86–89; Top Secret Report by J.C.W., March 6, 1946, TNA: CAB 126/145.

第2章 教授

- p.34 一九四〇年四月九日の未明 : Haarr, 290–97 ; Fen, 34.
「トロンハイムに向かうように」 : Haarr, 294.
- p.35 トロンハイムの港から歩いて : 著者によるトロンスターの家族へのインタビュー ; Njølstad, 15–17. 著者は Olav Njølstad に深く恩恵を受けた。彼の書いた大変参考になる素晴らしい伝記のおかげで、ライフ・トロンスターについて多くを知ることができた。
集まったなかに : ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31.
- p.36 集まった人びとに : N. A. Sørensen, “Minnetale over Professor Leif Tronstad,” LTP; Njølstad, 15–17.
「休眠政府」 : Njølstad, 15.
ほんの数日前にも : Haarr, 64.
- p.37 「あの飛行機は」 : 著者によるトロンスターの家族へのインタビュー.
- p.38 侵攻の翌日 : Petrow, 70–80.
国内各地で : Fen, 50–51.
- p.39 その任務は : N. A. Sørensen, “Minnetale over Professor Leif Tronstad,” LTP; Njølstad, 18–19.
五月一日 : Njølstad, 18–20.
「納屋には雌牛が」 : 著者によるトロンスターの家族へのインタビュー.
- p.40 ライフ・トロンスターの父親 : N. A. Sørensen, “Minnetale over Professor Leif Tronstad,” LTP; Jomar Brun, “Leif Tronstad,” *Det Kongelige Norske Videnskabers Selskab*, DORA: L-0001.
- p.41 「近ごろは毎日」 : トロンスターがヨセフィーネ・ラーセンに宛てた 1924 年 11 月 8 日付の書簡, LTP.
「かわいい天使」 : トロンスターがバッサに宛てた 1925 年 10 月 27 日付の書簡, LTP.
「愛を胸に抱いたまま」 : トロンスターがバッサに宛てた 1928 年 5 月 10 日付の書簡, LTP.
- p.42 街のあちこちに : 著者によるトロンスターの家族へのインタビュー.
「今日は素晴らしい日だ」 : 1932 年 7 月 23 日付 LTD.
実験のみならず : Njølstad, 55.
「お望みとあらば」 : 著者によるトロンスターの家族へのインタビュー.
まもなくトロンスターは : Ibid.; Håkon Flood, “Falt for Sitt Land,” DORA: L-0001; “Professor Leif Tronstad” (*Nature*, 1945), LTP.
- p.43 一九四〇年一月一日 : Report—“P. M. fra konferanse på Rjukan November 11, 1940 angående kapasiteten av tungtvannsanlegget,” November 11, 1940, VM: Box 4F-D17-98; Letter from A. Enger to Aktieselskabet Rjukanfos, November 19, 1940,

- VM: Box 4F-D17-98.
 リューカンが陥落してすぐに : Letter to Aktieselskabet Rjukanfos, June 11, 1940, VM: Box 4F-D17-99; ブルン・レポート.
 二日ばかりで工場を : Report—“P. M. fra konferanse på Rjukan November 11, 1940 angående kapasiteten av tungtvannsanlegget.”
- p.44 工場での用件をすませ : Jan Reimers, “Leif Tronstad slik jeg kjente ham,” NHM: Box 10B; Brun, 19–21; Njølstad, 30–32.
 ブルンは今後も : ブルン・レポート.
- p.45 一九四一年三月に : Brun, 21–23; Letter to Aktieselskabet Rjukanfos, February 27, 1941, VM: Box 4F-D17-98.
 「工場を首尾よく稼働させる責任」 : ブルン・レポート.
 それからまもなく : Letter from Bjorn Rørholt to Jomar Brun, March 3, 1985, VM: JBrun, Box 17; Jan Reimers, “Leif Tronstad slik jeg kjente ham,” NHM: Box 10B.
- p.46 ちょうど同じころ : Brun, 22.
 この情報は重要で : Njølstad, 36–40; Jan Reimers, “Leif Tronstad slik jeg kjente ham,” NHM: Box 10B.
 九月九日の朝 : Letter from Bjorn Rørholt to Jomar Brun, March 3, 1985, VM: JBrun, Box 17; Interview with Bjorn Rørholt. NHM: Box 16.
 「メイルマンは消えるべし」 : Interview with Haakon Sørbye, NHM: Box 16.
- p.47 「ここを出なくちゃならない」 : “Fortalt av Hans Kone, Edla Tronstad,” February 1992, DORA: L-0001; 著者によるトロンスターの家族へのインタビュー.
 「家族、わが家」 : 1941年9月22日付 LTD.
 翌朝の一〇時一五分に : 1941年9月23日付 LTD; Njølstad, 41.
 「ぼくはなんにも」 : 著者によるトロンスターの家族へのインタビュー.
- p.48 オスロに着いて : 1941年9月23–24日付 LTD.
 「特別待遇」 : トロンスターがバツサに宛てた 1941年9月22日付の書簡, LTP.
- p.49 「片道のみ有効」 : Leif Tronstad Passport, DORA: L-0001.
 輸送機に改造された : 1941年10月19–21日付 LTD.
 イギリス秘密情報部 (SIS) のはからいで : Letter from Bjorn Rørholt to Jomar Brun, May 3, 1985, VM, JBrun, Box 17.
 学生時代から勝手知ったる : 1941年10月21日付 LTD.
- p.50 ロンドンに来て最初の : 1941年10月26日付 LTD.
 この諜報員は : Kramish, 91–96 (アーノルド・クラミッシュ 『暗号名グリフィン——第二次大戦の最も偉大なスパイ』 新庄哲夫訳, 新潮文庫) ; Powers, 282 (『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか』) ; Dorril, 134.
 すぐにわかったのだが : Powers, 53, 94 (『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか』)
- p.51 かたやトロンスターは : Handwritten note, TNA: AB 1/355.
- p.52 ある日は : 1941年10月21日–12月1日付 LTD.
 「貴殿が興味をもっておられる」 : Unsigned Letter, October 23, 1941, TNA: AB 1/355.

- デューテリウムを発見した : Urey Report, December 1, 1941, NA: Bush-Conant Papers.
- p.53 この数週間に : Meeting of the Technical Committee, Tube Alloys, December 11, 1941, TNA: CAB 126/46; Rjukan Report, December 20, 1941, TNA: HS 2/184 ; Memorandum on Operation Clairvoyant, January 1, 1942, TNA: HS 2/218; トロンスターからペリンに宛てた 1943 年 11 月 30 日付の書簡, LTP.
「自分もノルウェーの」 : 1941 年 11 月 6 日付 LTD.

第3章 ボンゾー

- p.55 一九四一年一月二日の : TNA: HS 8/435, 14–17, 163–73; Jensen, 37–45; Lunde, 55–57.
第一印象だと : ハウケリの人事ファイル, TNA: HS 9/676/4.
「フィヨルドの海の精」 : *Life*, April 18, 1938.
- p.56 「敵に少しのチャンスも」 : Drummond, 56.
子どものころからルールと : 著者によるハウケリの家族へのインタビュー.
「これはおまえたちの友だ」 : Haukelid, 43.
「低い位置を狙え」 : Jensen, 41.
- p.57 「ドイツ人をごまんと」 : Bailey, 44.
「爆薬を扱っているときは」 : Jensen, 42.
授業では丸太を : History of the Training Section of SOE 1940–45, TNA: HS 8/435.
連日このスケジュールが : Ibid.
- p.58 「爆発するころには」 : Myklebust, 54.
「冷静で抜け目のない」 : ハウケリの人事ファイル, TNA: HS 9/676/4.
その同じ年に : 著者によるハウケリの家族へのインタビュー.
- p.61 ある晩 : ダン・カーズマンに宛てた書簡, KA.
とうとうハウケリはまた : 著者によるハウケリの家族へのインタビュー.
一九四〇年四月の初め : Haukelid, 16–20.
- p.62 「何してるのかい？」 : 著者によるハウケリの家族へのインタビュー.
- p.63 「忠誠を守り」 : Johnson, 47.
その後、ミッツスカウが : Haukelid, 21–25.
- p.65 国家弁務官のテアポーフェンは : Fen, 63; Johnson, 129–34, 285–87; Petrow, 99–124; Ivar Kragland Interview, IWM: 26660.
- p.66 一九四一年九月 : Nøkleby, *Gestapo*, 49–53, 165–69; Kjelstadli, 118–24.
「ひざまずかせる」 : Nøkleby, *Josef Terboven*, 171–72.
それと同時に : Kjelstadli, 124–26.
ハウケリは急遽 : 著者によるハウケリの家族へのインタビュー.
- p.67 オスロでレジスタンスの捜査主任を : Fehmer Report/Interrogation, NHM: FII, Fehmer.
身長一八三センチのブロンドで : Resume of Interrogation of Tor Gulbrandsen, October 10, 1942, TNA: HS 2/129.

- 「あの子は山に」：著者によるハウケリの家族へのインタビュー；Haukelid, 31.
- p.68 じつのところ、ハウケリは：Haukelid, 42.
 ここトラファルガー広場を見わたす：Ibid., 40–41；著者によるラグナル・ウルスタインへのインタビュー；Myklebust, 46–48；Rostøl and Amdal, 50–53；Lunde, 54–56.自身の回想録においてハウケリは、リングと会ったときのことをわずかながら記述しており、とりわけこの陸軍大尉にいかにか感銘を受けたかを語っている。ほぼひとり残らず、リング中隊の隊員たちによる回想録には、この将校との最初の面会時における同様の記憶が綴られている。
- p.69 「結婚はしてるかね？」：Myklebust, 46–48.
- p.70 ここではストードム・パークでの：History of the Training Section of SOE 1940–45, TNA: HS 8/435；TNA: HS 2/188；Jensen, 48–7；Haukelid, 43–44；Foot, 80.
- p.71 「これは戦争だ」：Rigden, 362.
- p.72 これは容赦のない訓練で：Haukelid, 44.
 「すこぶる頼りになり」：ハウグランの人事ファイル, TNA: HS 9/676/2. ハウケリの人事ファイルの一部はハウグランのファイルに間違っはいつているため、この参照となっている。
- p.73 「われわれは敵の占領地域において」：Dalton, 368.
 SIS のセクション D：Foot, 4–9；Stafford, 11–13.
 一九四二年一月四日：ハウグランの人事ファイル, TNA: HS 9/676/2.
 ざっと一五〇人のノルウェー人が：Jensen, 47；Myklebust, 66–67.
- p.74 ミーブルでハウケリが：Norwegian Section History, TNA: HS 7/174, p. 27；John Wilson, “Great Britain and the Norwegian Resistance,” NHM: Box 50A；Petrow, 127–29.
 ロフォーテンでの失敗：ルンネバルク・インタビュー，モーラン；“Minute to Minister,” February 1942, TNA: HS 8/321.
- p.75 おおっぴらに衝突いた：Progress Report of SOE for week ending January 28, 1942, TNA: HS 8/220.
 それからリューカン出身の：ポウルソンの人事ファイル, TNA: HS 9/1205/1；Poulsen, 59.
 それから二週間：Haukelid, 44–45.
- p.76 中隊はその射撃の腕前：1942年1月31日–2月3日付 LTD；Njølstad, 102–3；Kjelstadli, 176–81.
- p.77 ウィルソンは、自分には：Sæter, 4；“Special Confidential Report,” TNA: HS 9/1605/3.
 戦前には国際スカウト機構の：Wilson, 1–76.
 「求めるは救われし」：1942年2月1日付 LTD；Njølstad, 103.

第4章 ダム管理人の息子

- p.79 一九四二年三月二日の木曜日：1942年3月1–17日付 ESD；Hauge, 82–83.
- p.80 何世紀にもわたって：ESP.
 一六世紀になると：Sagasfos, 24.

- 「悪魔のごとく不遜な」：Nøkleby, *Josef Terboven*, 38.
- p.81 ニ〇世紀にはいると： “Norsk Hydro,” TNA: DEFE 2/220; Tranøy, 15.
ついに文明化の波が： Skinnarland Notes, ESP; 著者によるシンナルランの家族へのインタビュー； 著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー。
- p.83 一九四〇年四月九日： Skinnarland, *Hva Som Hendte*, ESP.
そして、ベルゲンに住む： *Bergens Tidende*, February 1, 2015.
- p.84 一九四二年の年が明けてすぐに： Skinnarland Notes, ESP. ヴェモルクの破壊工作に関する多くの歴史文献によれば、シンナルランはすでにイギリスにわたった時点で、ヴェモルクの重水に関連するドイツの動きについて情報を得ていたとされる。だがアイナル・シンナルラン本人が述べているように、これは明らかに間違っている。彼の渡英の目的は、むしろこの一帯におけるドイツの動向——たしかにそれはノシュク・ヒドロ社を中心としたものではあるが——に関する情報を提供すべく無線局を立ち上げることにあった。
- p.85 スタルハイムは船長の息子で： “Cheese’s Report,” July 30, 1941, TNA: HS 2/150; John Wilson, “On Resistance in Norway,” NHM: Box 50A.
- p.86 手術から二日後の： “Preliminary Report on Cheese’s Return Journey,” March 18, 1942, TNA: HS 2/151; Hauge, 90–93.
- p.87 「あいにく着くのが」： Hauge, 94.
- p.88 「われわれは六〇〇トンの」： Teleprint, March 15, 1942, TNA: HS 2/151.
- p.89 眠気覚ましにコーヒーを： Skinnarland Notes, ESP; Letter, May 29, 1942, NHM: SOE, Box 25; Preliminary Report on Cheese’s Return Journey,” March 18, 1942, TNA: HS 2/151.
「ガルテスン号はアバディーンに」： Hauge, 108.
- p.90 「巻き込まれた者は皆」： H. G. Wells, *The Worlds Set Free* (New York: Dutton, 1914), 222. (H・G・ウェルズ『解放された世界』浜野輝訳、岩波書店) [訳者注：本文での引用は同書の訳文による。ただし本文に合わせて表記を一部修正]
ロンドンで宙ぶらりんの： 1942年1月24日付 LTD. トロンスターは日記のなかで、ついに国防大臣から「祖国と国民にとってきわめて重要な任務」を命じられたと綴っている。
- p.91 ロフォーテンの急襲が： 1942年1月3日； 1942年2月13日； 1942年2月17日； 1942年2月21日； 1942年3月7日付 LTD.
「この目的を果たすためには」： 1942年1月1日付 LTD.
それからわかったのは： 1942年1月12日； 1942年3月4日付 LTD； 著者によるトロンスターの家族へのインタビュー。
- p.92 トロンスターは、妻や子どもたちと： 1942年3月7日付 LTD.
「まずひとつ」： Drummond, 19–20.
- p.93 いまではノルウェーで： “Clairvoyant,” January 1, 1942, TNA: HS 2/218.
リューカン出身のポウルソンが： Rjukan, December 20, 1941, TNA: HS 2/184.工場上部の水圧管路とバルブを六人で爆破する計画もあったが、この案は空爆が優先されたために却下されたことが、ポウルソンの回想から確認されている (Poulsso, 75).

- p.94 シンナルランが来る前に : Operation Grouse, March 28, 1942, NHM: SOE, Box 22.
シンナルランには、ポウルソンたちが : Ibid. 作戦における当初の指示では、シンナルランが重水に関する情報を提供することについての言及はなかった。とはいえ、シンナルランがノルウェーに戻ったときから、これは彼の活動の一部になった。この点についてはウィルソン中佐 (“Heavy Water Operations in Norway,” NHM: Box 50A) からシンナルラン本人 (アイナル・シンナルランがダン・カーズマンに宛てた書簡, ESP) まで関係者全員が確認している。
「若き英雄」: 1942年3月20日付 LTD.
三月二八日の土曜日 : “Report on Operation Undertaken by 138 Squadron,” March 29, 1942, TNA: HS 9/1370/8; Drummond, 21–26.
「空飛ぶ納屋のドア」: Lunde, 77.
- p.95 「組織のメンバーへの贈呈品」: “Operation Grouse,” March 28, 1942, NHM: SOE, Box 22.
その前の一週間 : “Sergeant Einar Skinnarland,” March 6, 1944, TNA: HS 9/1370/8.
- p.96 「ただし、いかに受けとめてもらえるかは」: Jensen, 94–95.
初日は : Lunde, 73–74.
「小型ヨット」: Jensen, 99.
- p.97 「すこぶる熱心な生徒」: シンナルランの人事ファイル, TNA: HS 9/1370/8.
「足を揃えて」: Drummond, 21.
午後一時四四分 : “Report on Operation Undertaken by 138 Squadron,” March 29, 1942, TNA: HS 9/1370/8.
- p.98 「戻るぞ」: アイナル・シンナルランへのインタビュー, KA.
足もとの小さなコンテナには : 著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー.

第5章 公道

- p.99 一九四二年四月二三日 : “Minutes of 4th Meeting of Technical Committee,” April 23, 1942, TNA: CAB 126/46.
「向かうところ敵なしの」: Kramish, 59 (『暗号名グリフィン』)
この脅威はいよいよ差し迫ったものとなり : Clark, *Tizard*, 210–14.
- p.100 「太陽の内部に匹敵する温度で」: Ibid., 214–17.
「地平線の彼方にある」: Churchill, *Their Finest Hour*, 338
- p.101 「五分五分」: チャーウェル卿から首相に宛てた 1941年8月27日付の覚書, TNA: AB 1/170.
「個人的にはいまの爆弾で」: Text of Churchill’s Statement, NA: Harrison-Bundy Papers.
「この兵器の開発を進めるのに」: Letter from General Ismay to Lord President of the Council, September 4, 1941, TNA: CAB 126/330.
ふたりのドイツ人パイロットが : Letter to Dr. Pye, September 11, 1941, TNA: AB 1/651.

- またドイツから移ってきた : Interview with Fritz Reichl, NB: Oral History.
「またも耳にはいったのだが」 : Telex from R. Sutton Pratt, November 10, 1941, TNA: AB 1/651.
- p.102 「われわれはそれに取り組んでいます」 : Powers, 124.(『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか』).このハイゼンベルクとボーアの有名な対面は、長らく歴史家や劇作家を惹きつけてきた一件である。そのとき何が語られ、誰がそれを語り、そしてそれが何を意味したのか——これらの問いには今もって答えが出ていない。真実の分析はトマス・パワーズによる『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか』などの優れた書籍に委ねるが、それでもパワーズが指摘するように、1942年の春にはイギリスがこの会話について知っていた可能性はきわめて高い。
一九四〇年の四月にすでに : Gowing, 43.
それから二カ月してパリが : Jablonski, 93–95.
ただし、すでに英米の科学者には : Smyth, 38 (H・D・スマイス『原子爆弾の完成——スマイス報告』杉本朝雄・田島英三・川崎榮一訳, 岩波書店) ; Walker, *German National Socialism*, 22–23.
- p.104 「最近の実験から」 : Minutes of 4th Meeting of Technical Committee, April 23, 1942,, TNA: CAB 126/46.
それからの数週間 : ウィルソンがトロンスターに宛てた 1942年5月1日付の書簡, NHM: Box 10/SIS A; Discussion with Professor Tronstad, May 1, 1942, VM: JBrun, Box 4; 1942年5月11–14日付 LTD.
- p.105 「ぼくらのジュース」 : トロンスターがブルンに宛てた 1942年5月15日付の書簡, LTP.
「ドイツ人たちが」 : トロンスターがヴァルゲランに宛てた 1942年5月15日付の書簡, LTP.
この二通の手紙を : 1942年5月14日付 LTD.
- p.106 そのひと月ほど前 : Nøkleby, *Josef Terboven*, 202; Reports on Televåg, TNA: HS 2/136; Herrington, 336.
「連中がわれわれを愛せないというなら」 : Nøkleby, *Josef Terboven*, 202.
- p.107 もしもドイツ兵に呼び止められたら : 著者によるリリアン・ガブルエルソンへのインタビュー, ESP.
ノルウェーにパラシュートで : Einar Skinnarland, Rapport avgitt i Oslo, September 6, 1942, NHM: SOE, Box 23B; Skogen, 45; ESP; *Bergens Tidende*, February 1, 2015.
- p.109 一九四一年一〇月三日 : パウル・ハルテックがエアハート・シェプケに宛てた 1951年10月30日付の書簡, Papers of Paul Harteck, Rensselaer Institute; Concerning the Journey to Norsk Hydro in Oslo and Rjukan, a Report by Paul Harteck, NB: G-341.
「ヒドロよ永遠なれ」 : 著者によるフィン・スールリーへのインタビュー。
重水施設をブルンが : パウル・ハルテックがエアハート・シェプケに宛てた 1951年10月30日付の書簡, Papers of Paul Harteck, Rensselaer Institute; Concerning the

- Journey to Norsk Hydro in Oslo and Rjukan, a Report by Paul Harteck, NB: G-341; ブルン・レポート; Schöpke Report, August 3, 1943, NB: G-341.
- p.110 一九四二年一月 : ブルン・レポート; Brun, 24–28.
- p.111 工場に戻ってくると : Minutes of a Meeting with Norsk Hydro, May 27, 1942, NB: G-341; パウル・ハルテックがエアハート・シェプケに宛てた 1951 年 10 月 30 日付の書簡, Papers of Paul Harteck, Rensselaer Institute.
- p.112 「周囲の手つかずの自然に」 : Drummond, 25.
さらにブルンが送ってよこした : Report sent to London, Summer 1942, VM: JBrun, Box 6a; Brun, 28–31.
- p.113 一九四二年六月四日 : Speer, 269–71 (アルベルト・シュペーア『第三帝国の神殿にて——ナチス軍需相の証言』上下巻, 品田豊治訳, 中央公論新社) ; Bagge and Diebner, 29–31; Cassidy, 455–57 (『不確定性』) ; Macrakis, 173–75; Powers, 142–50 (『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか』) ; Roane, 48–49, 78.
ナチスの軍事的勝利のおかげで : Irving, 72; Walker, *German National Socialism*, 26–27. 減速材としての黒鉛の使用に関してヴァルター・ボーテが計算を間違ったこと、つまりドイツが重水のみ焦点を搾ることにボーテの報告が寄与したことについては多くの記述がある。ただし Mark Walker は、おそらくドイツの計画ではボーテの研究とは関係なく重水を追求していたとの理由を十分な文献にもとづき詳細に説明し、そのなかでハイゼンベルクは黒鉛を使った原子炉には「重水による装置よりもはるかに大量のウランとはるかに大量の減速材が必要になる」と考え、また陸軍兵器局も「ホウ素やカドミウムを含まない、十分に純度の高い黒鉛を生産することは可能だが、ただし法外なコストがかかる」と判断したと述べている。
- p.114 七〇人を超える科学者が : Werner Heisenberg, “Research in Germany on the Technical Application of Atomic Energy,” *Nature* (August 16, 1947), NB: Goudsmit Papers, III, B10, F94; C. F. von Weizsäcker, “A Possibility to Produce Energy from U-238,” 1940, NB: Goudsmit Papers, III, B10, F95; Walther Bothe, “Die Diffusionslänge für thermische Neutronen in Kohle,” 1940–1941, Deutsches Museum Archiv.
「公道」 : ヴェルナー・ハイゼンベルクへのインタビュー, DIA: DJ 31.
ところが、それから二カ月が過ぎ : Bagge and Diebner, 28–29; Nagel, 77.
- p.115 「現況では」 : Bagge and Diebner, 29–32.
その同じ日に : Vortragsfolge, February 26, 1942, NB: Goudsmit Papers, III, B25, F13.
- p.116 「原子を破壊するという」 : Goebbels, 140.
- p.117 「船舶、ひょっとしたら飛行機にも」 : Karlsch, 87–89. このハイゼンベルクの発言を長いこと歴史家は知らずにいた。2005 年に Rainer Karlsch がロシアの文書館で見つけた資料から、ハイゼンベルクは実際にプルトニウム爆弾を奨励していたが、近いうちに関与できるとは思っていなかったことが明らかになった。
- p.118 ただし原子エネルギーの利用に : Walker, *German National Socialism*, 32.
ウィンストン・チャーチル首相は : Sandys, 149–51; Meacham, 180–84; Moran, 50–

- 57 (ロード・モーラン『チャーチル——生存の戦い』新庄哲夫訳, 河出書房)
- p.119 その週の前半に : Memorandum Report on Proposed Experiments with Uranium, NA: Bush-Conant Papers.
- p.120 「ウラン委員会」 : Smyth, 72–84 (『原子爆弾の完成』)
 「ドイツの爆弾が」 : レオ・シラードがヴァネヴァー・ブッシュに宛てた 1942 年 5 月 26 日付の書簡, NA: Bush-Conant Papers; Letter to Compton from Leó Szilárd, June 1, 1942, NA: Bush-Conant Papers.
 「オーケー、V・B」 : ヴァネヴァー・ブッシュがローズヴェルト大統領に宛てた 1942 年 6 月 17 日付の書簡, NA: Bush-Conant Papers.
 六月二〇日 : Meacham, 183–84.
- p.121 「われわれより先に敵が」 : Churchill, *Hinge of Fate*, 380.
 首相がロンドンに戻って数日後 : Note on Mr. Norman Brooke, Deputy Secretary of War Cabinet Office, July 3, 1942, TNA: HS 2/184; Akers Discussion with Norman Brooke, June 30, 1942, NHM: Box 16.

第 6 章 コマンド指令

- p.124 「おれの一世代のチャンス」 : Poulsson, 76.
- p.125 そこで三週間にわたり : SOE Group B Training Syllabus, TNA: HS 7/52–54.
 「覚えておけ」 : “Opening Address,” TNA: HS 7/52–54a.
- p.126 「第一印象よりもはるかに」 : ポウルソンの人事ファイル, TNA: HS 9/1205/1.
 ポウルソンはリューカンで : 著者によるポウルソンの家族へのインタビュー; ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189.
- p.127 「人生で一番悲しい日」 : Poulsson, 31; ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189.
- p.128 「泥や石造りの小屋に」 : Poulsson, 49–59. この部分の引用はポウルソンの日記に綴られていたもので、ヴェモルク襲撃に関する彼自身の回想録からの抜粋である。
 スパイ訓練を終えて : ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189; Poulsson, 80–85.
- p.129 結局、近いうちに : Letter from Malcolm Munthe to Poulsson, Haukelid, Helberg, and Kjelstrup, June 13, 1942, TNA: HS 2/172.
- p.130 「任務に不適格」 : クヌート・ハウケリの人事ファイル, TNA: HS 9/676/4. この事故が正確にはいつ発生したのか——そしていつハウケリが部隊から外されたかについては記録上ははっきりしない。ある医師の報告では 8 月半ばとなっているが、別の報告では 7 月半ばになっている。ハウケリの代わりにヘルバルグがはいつたとポウルソンが述べている。部隊のもうひとりのメンバーであるイエストラン (Gjestland) もまたリストから除外された。
- p.131 目録は : Stores Ready to Be Packed for Grouse I, NHM: SOE, Box 22; Gallagher, 19.
 「少人数の独立した組織をいくつか」 : Operation Instructions for Grouse, August 31, 1942, NHM: Box 25.
- p.132 同じ日の : 1942 年 8 月 31 日付 LTD.
 以後、王家の血を引く : Letter from Keyes to Prime Minister, October 14, 1941, DEFE 2/698.

- チャーチルがアメリカから戻ると : Mann, 104, 146, 165–68.
- p.133 四人の男たちは : Lurgan Report, September 3, 1942, TNA: HS 2/184.
- p.134 トロンスターは自分も : 1942年9月3日付 LTD.
 それでもときおり : 1942年10月24日付 LTD.
 この三月に : 1942年3月27日–8月30日付 LTD.
- p.135 その年の前半 : Nøkleby, *Josef Terboven*, 197–99; Warbey, 140–44.
 「戦争とは」 : 1942年8月7日付 LTD.
- p.136 「イギリスの某所」 : ポウルソンがハウケリに宛てた 1942年9月10日付の書簡, TNA: HS 2/172.
 彼らが無線で : Letter from Munthe to Gjestland, August 8, 1942, TNA: HS 2/172.
 「案の定」 : ポウルソン／ヘルバルグがハウケリに宛てた 1942年9月29日付の書簡, TNA: HS 2/172.
 一〇月一日 : Freshman Report, November 14, 1942, NHM: FOIV, Box D17.
- p.137 石を彫り上げたような : ファルケンホルストの人事ファイル, PERS 6–24, Barch-MA; Bericht des Genralobersten v. Falkenhorst, ZA1–1749, Barch-MA; Petrow, 31–34.
- p.138 「消音装置つきの自動小銃に」 : Freshman Report, November 14, 1942,, NHM: Box 10B.
 「私は真摯に」 : Nøkleby, *Josef Terboven*, 212.
 「諸々の破壊行為を償うために」 : Ibid., 213.
- p.139 スウェーデンとの国境の閉鎖が : Kjelstadli, 166–68; Nøkleby, *Gestapo*, 175–77.
 今後いかなる襲撃も : Kjelstadli, 154–56; Nøkleby, *Josef Terboven*, 215–16.
 「今後はヨーロッパもしくは」 : German Order to Kill Captured Allied Commandos and Parachutists, Report FF-2127, TNA: WO 331/7. 1942年10月18日の日付になっているが、この報告には「この指令は10月10日に連隊指揮官ならびに相当階級の参謀将校に配布された」と書かれている。また基本的に同じことを述べた10月7日付のドイツ国防軍への公式伝達も存在した。

第7章 健闘を祈る

- p.141 一〇月二日 : ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624.
 「ついに来たぜ」 : Sæter, 45.
 チルターン・コートで : Ibid., 56.
 グラウス隊はリューカンで : Freshman — Appendix A, October 17, 1942, NHM: Box 25.
- p.142 それからウィルソンは : Sæter, 56–57; ハウグランへのインタビュー, IWM, 26624.
- p.143 「ここはピカデリー」 : Freshman — Appendix A, October 17, 1942, NHM: Box 25.
 「この任務は」 : Nota tang Freshman, June 30/03, NHM: Box 25; ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189; Myklebust, 88–89.
- p.144 「健闘を祈る」 : Sæter, 57.
 STS26がある : ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
 「きわめて重要な仕事」 : Ibid.

- 「殺し屋学校」: Ibid.
- p.145 ルンネバルグはノルウェー北西部の : Ibid.
「自然のなかにひとりで」: Myklebust, 21.
二〇歳になるころには : ルンネバルグ・インタビュー, モーラン; ルンネバルグへのインタビュー, IWM: 27187.
- p.146 「この状況に平気な顔を」: Myklebust, 12.
「これから洋服屋に行くぞ」: ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
- p.147 「一番、行け!」: Air Transport Operation Report, October 18, 1942, TNA: HS 2/185; Gallagher, 20–21.
- p.148 眼下には : Topography of Hardangervidda Report, October 13, 1942,, TNA: HS 2/184; Mears, 47–49; Adamson and Klem, 141–42.
着陸に備えて : ポウルソン・レポート; Gallagher, 22; Berg, 104.
- p.149 隊員たちは大きな岩の陰に : Grouse Equipment, NHM: SOE, Box 22; Myklebust, 86; Lauritzen, 32.
- p.150 「じつは新しい命令が」: Halvorsen, *Den Norske Turistforening årbok 1947*.
たいした役にも : Sæter, 59.
それから二日かけて : Poulsson, “General Report,” VM: JBrun, Box 4; ハウグラン・レポート; ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624; Gallagher, 24–25.

第8章 気合い充分

- p.152 一〇月二〇日 : Report from Skinnerland, November 1, 1942, NHM: SOE, Box 23; Ueland, 60–61; Message from Stockholm, June 15, 1942, TNA: HS 2/172.
「ロンドンからの最新のニュース」: Operation Grouse Instruction, NHM: SOE, Box 22.
- p.153 「一時間後にお待ちしています」: Recollections of Tomy Brun, LTP; Letter from Brun to Commander Thorsen, September 8, 1984,, VM: JBrun, Box 17; Per Dahl, *Heavy Water*, 167–69.
ウィンストン・チャーチル自らが : 1942年11月3日–7日付 LTD.
- p.154 ヴェモルクはもはや : Personal for Captain Tronstad, October 28, 1942, NHM: Box 10/SIS A; Freshman Report, November 14, 1942, NHM: FOIV, Box D17.
- p.155 グラウス隊がイギリスを発った : Drew, 84–85; Henniker, *Memoirs of a Junior Officer*, 1, 22–188. フレッシュマン作戦に関しては、Drew らによる書籍が貴重な資料となっており、本書のこの部分についてさらに詳しく知りたい方はぜひ参照いただきたい。
「気合い充分」: Note written by Mark Henniker, given to Peter Yeates, 1983, KA.
ヘニカーは、統合作戦司令部による : Minutes of Meeting in COHQ, October 26, 1942, TNA: DEFE 2/224; Note written by Mark Henniker, given to Peter Yeates, 1983, KA.
- p.156 独身の工兵は : Notes, KA; *Yorkshire Evening Post*, August 15, 1984; Drew, 113–25.
誰かに訊かれたら : Mark Henniker, Report on Operation Freshman, November 23, 1942, TNA: DEFE 2/224.

- バルフォード基地での : Report by Group Captain Tom Cooper, 1942, TNA: AIR 20/11930; Drew, 87–89; Interview Notes, KA.
- p.157 「知る必要はない」 : Drew, 87–89.
たしかにドイツは : Lynch, 8–21.
いっぽうヘニカーの : Ibid., 196–97.
この「ぶらぶら」の時間が : Report by Group Captain Tom Cooper, 1942, TNA: AIR 20/11930; Wilson, 84.
- p.158 統合作戦司令部は : Freshman Plan, October 14, 1942, TNA: DEFE 2/224; Notes on Practicability of Operation, October 30, 1942, TNA: DEFE 2/224; Freshman Outline Plan, October 13, 1942, TNA: DEFE 2/224; Notes on Operation Freshman, October 17, 1942, TNA: DEFE 2/224; Mark Henniker, Report on Operation Freshman, November 23, 1942, TNA: DEFE 2/224. これらの報告書や会議の議事録等の記録から、統合作戦司令部の計画立案者らは驚くほど回を重ねてフレッシュマン作戦の準備をしてきたことがわかる。後からあれこれ言うのはたやすいが、思慮や準備が足りなかったと彼らを責めることはできない。
- p.159 「ほぼ確実に」 : Minutes of Meeting on Operation Freshman, October 14, 1942, TNA: DEFE 2/224.
SOE は、工兵たちを : Operation Freshman, Outline Plan, October 14, 1943, NHM: Box 10C; Report on 38 Wing Operation Order #5 — “Operation Freshman,” December 8, 1942, TNA: DEFE 2/219.
- p.160 「お母さんに頼まれて」 : Special Report on Escape Routes from Vemork to Swedish Frontier, October 12, 1942, NHM: Box 10/SIS C.
部隊を二五〇～三〇〇人に : Freshman Report from Barstow, November 3, 1942, TNA: DEFE 2/224; Letter from A.P.1 for C.A.P., October 31, 1942, TNA: DEFE 2/219; Letter from Colonel Gubbins to Major General Haydon, October 30, 1942, TNA: DEFE 2/219.
「この時期におこなうことが」 : Letter from Mountbatten to A.O.C.-in-C., October 29, 1942, TNA: DEFE 2/219.
「最優先とすべきものだ」 : Notes on Operation Freshman, October 17, 1942, TNA: DEFE 2/219.
- p.161 一二月二日の正午 : Freshman Training, October 27, 1942,, TNA: DEFE 2/219; Drew, 92.
天候も着陸場所も : Plant Installation and Proposed Demolition, November 16, 1942, TNA: DEFE 2/224; Vemork Power Station and Electrolysis Plant Report, October 30, 1942, TNA: DEFE 2/219; Operation Lurgan, Preliminary Technical Report, TNA: HS 2/185.
- p.162 クヌート・ハウグランは寒くて : ポウルソン・レポート; ハウグラン・レポート; ハウグランへのインタビュー, IWM: 27212; ポウルソンへのインタビュー, IWM: 26625; ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624; Poulsson, 91–99; Gallagher, 24–27; Sæter, 57–62.

- p.165 「ぼくらは相当参ってる」：ポウルソン・レポート。
ずっと無線士になりたかった：著者によるハウグランの家族へのインタビュー；Sæter, 9-40；ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624.
- p.166 とうとう武装解除の：Sæter, 26.
- p.167 オスロに出て：ハウグランの人事ファイル, TNA: HS 9/676/2.
「もの静かで、気合い充分」：Ibid.
ところがいま：ハウグラン・レポート；ハウグランへのインタビュー, IWM: 27212.
- p.168 ようやく仲間が：Haukelid, 97-99.
「ヘルバルグは昔のことわざを」：ポウルソン・レポート.
- p.169 ダムに着いたヘルバルグは：Claus Helberg, “Report About Einar Skinnarland,” July 30, 1943, NHM: SOE, Box 23.
新雪が降り：Njølstad, 99; Berg, 114.
翌日：ハウグラン・レポート；Sæter, 45, 62；ハウグランへのインタビュー, IWM: 27212；ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624.
- p.171 「岩だらけの場所だが」：Message from Grouse Primus, November 9, 1942, TNA: HS 2/172.

第9章 心許ない運命

- p.172 ハイパークに隣接する：Hurum, 114-16.
「連絡をくれて」：Message to Grouse, November 2, 1942, NHM: SOE, Box 22. 本書で著者はトロンスターがこの伝言を返したとした。記録ではグレンドン・ホルのホームステーションの通信員に託した返答を実際に誰が書いたかについてほとんど触れていないが、言及しているものはトロンスターかウィルソンのどちらかを挙げている。
最悪の事態を心配した：Private cypher from Stockholm, November 8, 1942, TNA: HS 2/172.
「バッテリーが切れたため」：Message from Gouse, November 9, 1942 TNA: DEFE 2/220.
- p.173 「引きつづき頼む」：From Colonel Wilson to Grouse, November 9, 1942, TNA: HS 2/184.
「全長七〇〇メートルほどの」：Message from Grouse, November 10, 1942, TNA: DEFE 2/220.
一一月一二日：ヨーマル・ブルンがアーノルド・クラミッシュに宛てた 1986年8月6日付の書簡, VM: JBrun, Box 6a; Letter from Jomar Brun to Bjørn Rørholt, May 25, 1985, VM: JBrun, Box 17; 1942年11月12日付 LTD.
「必要なあらゆる手段」：Niederschrift — Besuch von Regierungs-Baurat Dr. Diebner, September 2, 1942, VM: Box 4F/D17/98.
- p.174 彼を反ナチだと踏んだ：Hans Suess, “Virus House: Comments and Reminiscences,” *Bulletin of Atomic Scientists*, June 1968; Brun, 29-30.
ヴェモルクはざっと：Freshman Report, November 17, 1942, TNA: DEFE 2/219.
自身が建設に手を貸した：1942年11月12日付 LTD.

- 「超爆弾」：Clark, *Tizard*, 215.
- p.175 この作戦と並行して：Progress Report for SN Section, November 3, 1942, NHM: SOE, Box 3A.
「あなたのちっちゃな息子は」：バッサがライフに宛てた 1942年10月11日付の書簡, LTP.
- p.176 「ぼくは元気です」：ライフがバッサに宛てた 1942年10月4日付の書簡, LTP.
十一月五日：Minutes of Meeting held at 154 Chiltern Court, November 15, 1942, TNA: DEFE 2/224; 1942年11月15日および11月20日付 LTD; Freshman—Translations of Messages, November 15, 1942, TNA: HS 2/184.
- p.177 「見栄えのいい紛うことなき勇敢な軍人たち」：1942年11月15日付 LTD.
「ノルウェーの工場を」：Freshman Report, November 17, 1942, TNA: DEFE 2/219.
サン湖畔の小屋では：ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624; Myklebust, 100–101.
- p.179 月が満ちはじめる：ポウルソン・レポート; Claus Helberg, “Report about Einar Skinnarland,” July 30, 1943, NHM: SOE, Box 23.
誰よりも忙しかったのは：ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624; Sæter, 65–66.
- p.180 「ムース湖などの」：Message from Grouse, November 17, 1942, TNA: DEFE 2/219.
その同じ日：ハウケリの人事ファイル, TNA: HS 9/676/4.
「隊長、どれのことですか?」：Note written by Mark Henniker, given to Peter Yeates, 1983, KA; Henniker, *Image of War*, 95–98.
- p.182 「光と陰」：Henniker, *Image of War*, 95–98.
- p.183 「やめるにはもう遅すぎて」：Note from C.C.O., Operation Freshman, November 18, 1942, TNA: DEFE 2/224.
すでにチャーチルには：Memorandum to Prime Minister, November 17, 1942, TNA: DEFE 2/224.
ココスキッテンにも：Petterssen, Forecasting for the Freshman Operation, November 22, 1942, NHM, FOIV, Box D17. 特筆すべきこととしてペッテルセンは、アイゼンハワー将軍がDデイ〔訳者注：1944年6月6日：連合軍によるノルマンディー上陸作戦開始日〕の日程を決めるために相談した気象学者であった。このとき天候により侵攻を一日遅らせるようペッテルセンが指示したおかげで無数の命が救われた可能性は高い。
- p.184 ウォリス・ジャクソン、ビル・ブレイを：Drew, 93–103; Interview with Michael Douglas, IWM: 31404; Report by Group Captain Tom Cooper, 1942, TNA: AIR 20/11930.
「こいつには四〇〇キロを」：Drew, 97.
- p.185 「母さん、ぼくの洗濯物と」：ウォリス・ジャクソンによる 1942年11月18日付の書簡, KA
「これから襲撃に行くことを」：Drew, 118–19.
「何が起ころうと」：Report by Group Captain Tom Cooper, 1942, TNA: AIR 20/11930.

- スチール製のヘルメットを : Freshman Report — Appendix A — Standard Gear, TNA: DEFE 2/219.
- p.186 大半が二〇代前半の : Drew, 103.
足底の床に : Ibid., 105.
予定時刻をやや遅れて : Freshman Message List, November 18–20, 1942, TNA, DEFE 2/219; Report on 38 Wing Operation Order No. 5, December 8, 1942, TNA, DEFE 2/219.
- p.187 乗員と工兵合わせて : Note written by Mark Henniker, given to Peter Yeates, 1983, KA. フレッシュマンの搭乗員とグラウス隊が用いた標準時間については文献に不一致がある。混乱を避けるため、著者はスキッテン飛行場からの飛行機の離陸時間も含めてノルウェーの標準時間を採用した。
「今夜、大きな二羽の鳥に続いて」 : 1942年11月19日付 LTD.
ハウグランが受信確認を : Freshman — Appendix A, October 17, 1942, NHM: Box 25; ハウグランへのインタビュー, IWM: 27212; ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189; ポウルソン・レポート.

第10章 消息不明

- p.189 「レベッカが聞こえる」 : クヌート・ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624; ポウルソンへのインタビュー, IWM: 26625; TNA: HS 2/190; Sæter, 66–67; ポウルソン・レポート.
- p.190 それから一時間 : ポウルソン・レポート.
月を背に飛んでいると : Report on 38 Wing Operation Order No. 5, December 8, 1942, TNA: DEFE 2/219; Letter from Colonel Wilson to Colonel Head, January 21, 1943, TNA: DEFE 2/224; Drew, 127–31.
- p.193 ハリファックス B を東に : Report on 38 Wing Operation Order No. 5, December 8, 1942, TNA: DEFE 2/219; Eyewitness Report — The Planes that Were Wrecked in the Egersund District, April–June 1943, NHM: SOE, Box 23; Report from Johannes Mukejord, KA; Berglyd, 59–61. ハリファックス B の正確な飛行経路は不明だが、ハウグランがユーレカ・レベッカの電子音を聞いており、またハリファックス A の装置が壊れていたことからすると、ハリファックス B が現場に到着したことは明らかである。さらにエーゲルスン周辺の住民が、墜落前に飛行機が何度か飛来したと報告しているが、おそらくこれは失ったグライダーを探していたために違いない。
- p.194 いっぽう谷を越えた : Report from Anne Lima, March 13, 1944, NHM: SOE, Box 23; Report to Chief of Police Rogaland from Lensmann in Helland, November 21, 1942, TNA: WO 331/18; Statement of Lensmann Trond Hovland, 1945, TNA: WO 331/18; Statement by Tellef Tellefsen, June 1945, TNA: WO 331/18; Case No. UK-G/B. 476, United Nations War Crime Commission Against Von Behrens and Probst, TNA: WO 331/387.
- p.195 スキッテン飛行場から : Freshman Message List, November 18–20, 1942, TNA: DEFE 2/219; Drew, 169.

- p.197 その最悪の日の午後 : 1942 年 11 月 20 日付 LTD.
トロンスターとウィルソンは : Drummond, 51–52.
- p.198 この悲劇のあとに : John Wilson, “On Resistance in Norway,”NHM: Box 50A.
「そいつはありがたい」 : Ibid.
「戦争が終わる前に」 : Letter from Gubbins to Haydon, November 20, 1942, TNA: DEFE 2/219.
「同じ問題に」 : ハンステーンがマウントバッテンに宛てた 1942 年 11 月 21 日付の書簡, TNA: DEFE 2/219.
- p.199 「君たちは立派な」 : Message to Grouse, November 20, 1942, NHM: SOE, Box p22.
「一月九日から」 : BBC Monitoring Service — Freshman, November 21, 1942, TNA: DEFE 2/224.
この報告は嘘に : 1942 年 11 月 21 日付 LTD.
「何たること !」 : Minute by the Prime Minister, November 22, 1942, TNA: DEFE 2/219.
アレン中尉が降伏したのち : Statement of Lensmann Trond Hovland, 1945, TNA: WO 331/18.
シュレットブーの駐屯軍 : Letter from Major Rawlings to PS&W Branch, July 2, 1945, TNA: WO 331/18.
しかもカーキ色の : Wigner, 447–48.
- p.200 「助命を許しては」 : German Order to Kill Captured Allied Commandos and Parachutists, Report FF-2127, TNA: WO 331/7.
シュロットベルガーがこの状況を : Shooting by the Germans of Allied Personnel Captured in Norway, January 14, 1944, TNA: HS 2/184; Case No. UK-G/B. 476, United Nations War Crime Commission Against Von Behrens and Probst, TNA: WO 331/387; Statement by Werner Siemens, July 6, 1947, TNA: WO 331/387; Report on the Interrogation of Colonel Oberst, September 12, 1945, TNA: WO 331/387; Statement by Cid Gunner, June 29, 1945, TNA: WO 331/18; Statement by Michael Spahn, June 29, 1945, TNA: WO 331/18; Statement by Rolf Greve, June 14, 1945, TNA: WO 331/18.
その日の午後遅く : Berglyd, 50–52; Statement of Kurt Hagedorn, August 31, 1945, TNA: WO 331/387; Statement by Cid Gunner, June 29, 1945, TNA: WO 331/18; Letter from Major Rawlings to PS&W Branch, July 2, 1945, TNA: WO 331/18; Statement by Tellef Tellefsen, June 1945, TNA: WO 331/18.
- p.201 「曳航していた飛行機の」 : Tagesmeldung, November 20, 1942, RW 39/39, Barch-MA; BDS in Oslo Berichtet, November 21, 1942, DIA: DJ 31; Irving, 139–42.
- p.202 突き出た顎に : Brauteset, 32.
ヴッパータールの工業都市に : フェーリスの人事ファイル, VBS 286/6400009794, Bundesarchiv, Berlin.
- p.203 そこでフェーリスは : Interrogation of Wilhelm Esser, July 10, 1945, TNA: WO 331/386.

- ジェームズ・ケアンクロス : Drew, 111–14.
 グライダーAが墜落したのち : Berglyd, 63–79; Statement of Ravn Tollefsen, date unknown, TNA: WO 331/386; Statement of Martin Fylgjesdal, August 3, 1945, TNA: WO 331/386; Statement of Sigurd Stangeland, July 25, 1945.
- p.204 まもなくドイツの巡察隊と : Statement of Fritz Seeling, November 6, 1945; Statement of Fritz Feuerlein, September 28, 1945, TNA: WO 331/386; Statement of Kurt Seulen, date unknown, TNA: WO 331/386; Statement of Erich Hoffmann, December 12, 1945.この残虐な行為に関与した者のうち四人は戦後に捕らえられた。想像に難くないが、おそらく自分にできるかぎり都合の良い陳述を試みたがゆえに、彼らの説明は矛盾している。

第11章 教官

- p.208 「工作隊は交戦のうえ」 : Report from Wilson (SN), November 21, 1942, TNA: HS 2/184.
 グライダー作戦が失敗し : ポウルソン・レポート; Message from Grouse, November 23, 1942, NHM: SOE, Box 22.
 ただしひとまず四人揃って : ポウルソン・レポート.
- p.209 物資を分けると : Poulsson, 109–15; Sæter, 74.
- p.211 「この作戦の隊長を」 : Joachim Rønneberg, “Operation Gunnerside” (IFS Info, 1995); ルンネバルグ・インタビュー, モーラン; ルンネバルグへのインタビュー, IWM: 27187; Gallagher, 40.
- p.212 訓練を終えて : 著者によるラグナル・ウルスタインへのインタビュー.
 「もともと人とは違う」 : Myklebust, 84–85.
 「どこに行くことに」 : 1942年12月1日付LTD; Minutes of Meeting Held at Norgeby House, November 26, 1942., TNA: HS 2/185; ヨアキム・ルンネバルグへのインタビュー, KA.
- p.213 最初に選んだ : ストロムスハイムの人事ファイル, TNA: HS 9/1424/2; ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
 「岩山のごとく」 : Ibid.
 次に決めたのは : カイセルの人事ファイル, TNA: HS 9/824/2; Lunde, 1–68.
- p.214 三人目の : イードランの人事ファイル, TNA: HS 9/774/4; Rostøl and Amdal, 1–62.
- p.215 四人目に選んだのは : ストールハウグの人事ファイル, TNA: HS 9/1420/7; Lunde, 88.
 チームの最後の : 著者によるラグナル・ウルスタインへのインタビュー; ルンネバルグ・インタビュー, モーラン; Myklebust, 108–11.
- p.216 「さて、私は」 : Rostøl and Amdal, 75.
 次にルンネバルグは : Myklebust, 107–9.
 オスロから一〇キロ北西に : Nøkleby, *Gestapo*, 67–68; Wright, 110.
 ゲシュタポ将校のヴィルヘルム・エッサーが : Interrogation of Wilhelm Esser, July 10, 1945, TNA: WO 331/386; Statement of Erik Dahle, August 15, 1945, TNA: WO 331/383; Statement of Hans Behncke, August 14, 1945, TNA: WO 331/383.

- p.217 「特別な液体」：「Bericht über Sabotageunternehmen Lysefjord-Egersund, December 27, 1942,」 RW 39/40, Barch-MA.
- p.218 クンマースドルフ実験場では：Nagel, 45–47; Abschrift: Uran-Bomben, May 8, 1943, DIA: DJ 29.
一九四二年の晩秋：「Bericht über einer Würfelversuch mit Uranoxyd und Paraffin,」 G-125, Deutsches Museum Archiv; Interview with Georg Hartwig, NB: Oral History; Walker, *German National Socialism*, 95–97.
「死ぬほど退屈な仕事」：Nagel, 73.
- p.219 「これがぜんぶ豚脂だったら」：Ibid.
軍事・軍需生産相シュペーアと：エーリヒ・バッゲへのインタビュー, DIA: DJ 29.
いっぽうその夏の初めに：Irving, 117–18; Walker, *German National Socialism*, 84.
ところが、その後の：「Bericht über zwei Unfälle beim Umgang mit Uranmetall,」 G-135, Deutsches Museum Archiv; Per Dahl, *Heavy Water*, 188–90.
だがこの惨事は：「Bericht über einer Würfelversuch mit Uranoxyd und Paraffin,」 G-125, Deutsches Museum Archiv; Interview with Georg Hartwig, NB: Oral History; Bagge and Diebner, 25; Karlsch, 73, 98–100; Walker, *German National Socialism*, 97.
- p.220 一月二日：Rhodes, 401, 438–40(『原子爆弾の誕生』)
「とくに目を見張るような」：Wigner, 447.

第12章 奴らに捕まるわけがない

- p.222 一月三日の夜明け間近：「Gestapo Lager Razzia og Unntagstilstand i Rjukan,」 NHM: FOIV, Box D17; スールリー回想録。
ヴェモルクで働く：スールリー回想録。
- p.223 その日、ハンスと：Skinnarland, *Hva Som Hendte*, ESP.
- p.224 一月八日、クヌート・ハウケリが：1942年12月8日付 LTD。
「援護射撃中に迷い込んだ」：Njølstad, 173。
ハウケリは自分の経歴から：著者によるラグナル・ウルスタインへのインタビュー； Myklebust, 108–9。
「重水はきわめて危険」：Haukelid, 74; ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31。
ロンドンに来たのは： *Instruks for Bonzo*, December 18, 1942, NHM: FOIV, Box D17; Letter from Malcolm Munthe to Gjestland, August 8, 1942, TNA: HS 2/172.
- p.225 「総力をあげて」：Haukelid, 75.
- p.226 「われわれは厳しい状況」：Message from Swallow, December 9, 1942, NHM: FOIV, Box D17。
「可能なかぎり最優先で」：Method of Clearing Traffic, October 30, 1942, TNA: HS 2/172。
「四人のゲシュタポが」：Skogen, 12–14; Friend Report — Øystein Jahren, NHM: SOE, Box 23B.
- p.227 ちょうどそのころ：Skinnarland Notes, ESP; 著者によるマリエッレ・シンナルラン

- へのインタビュー; 1942年12月10日付 ESD; Report by Gunlsik Skogen, December 1, 1943, TNA: HS 2/174; Ueland, 117–20.
- p.228 一二月一日の午後遅く : ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
- p.229 「いったい何の騒ぎだ」: Ibid.
 ガンナーサイド作戦をまかされてから : Ibid.; Myklebust, 110–17; Gunnerside — Operating Instructions, December 15, 1942, NHM: FOIV, Box D17; ルンネバルグ・レポート.
- p.231 「わかった」: ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
- p.232 「しかるべき訓練を」: O'Connor, 47–48.
 リームが生徒たちに : Ibid., 45.
 ガンナーサイドの隊員 : Orientering vedr. Gunnerside. December 11, 1942, NHM: FOIV, Box D17; Gunnerside—Operating Instructions, December 15, 1942, NHM: FOIV, Box D17; Myklebust, 119–21; Rostøl and Amdal, 74–78; Lunde, 88–90; ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
- p.234 破壊工作の訓練の合間に : ルンネバルグ・インタビュー, モーラン; Lunde, 89; ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31.
 「こいつはしょっぱなから」: ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
 「誰だ?」: スールリー回想録; Skogen, 29–31; Sæter, 74.
- p.236 一斉捜査のさなか : ポウルソン・レポート; Sæter, 74–75.
- p.237 「ビタミンとミネラル」: Gallagher, 80; Sæter, 75.
 「積極的な役割」: Message to Swallow, December 13, 1942, NHM: SOE, Box 22.
 ところが、ことあるごとに : ポウルソン・レポート; Sæter, 74–75; ヘルバルグへのインタビュー, IWM: 26623; Mears, 101.
- p.238 シンナルランは充電したバッテリーと : 1942年12月10–18日付 ESD.
 一二月一七日 : Message to Swallow, December 17, 1942, NHM: SOE, Box 22; History of Grouse/Swallow Eureka, December 1943, NHM: SOE, Box 23.
 「状況が許せば」: ジョージ・リームからの1942年12月18日付の書簡, TNA: HS 2/185.
- p.239 「先に進み」: Handwritten briefing notes, December 14, 1942, NHM: FOIV, Box D17; Rostøl and Amdal, 76. ガンナーサイド隊にトロンスターがかけた別れの言葉にはさまざまなバージョンがある。この引用は彼の報告メモ (briefing notes) ならびに Rostøl and Amdal の説明をもとにまとめたものである。
 「そう簡単におれたちを」: Myklebust, 127.

第13章 狩りの掟

- p.240 げっそりそこけた頬に : Poulsson, 19–21; ポウルソン・レポート. この小屋は歴史文献の多くで Svensbu (スヴェンスブー) と呼ばれているが、これは後からつけられた名前である。当時のホームステーションとの暗号文では、この小屋は Fetterhytta (従兄弟の小屋) と呼ばれていた。さらにポウルソンが仲間よりも数日前に小屋に着いたのか、同時に着いたのかについても多少の混乱がある。

- p.241 「ランゲショー湖から」：Poulsson, 90.
 カヌーに弾丸の穴が：ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189; 著者によるスヴァイン・ヴェトレ・トラエへのインタビュー.
 「この辺りに獲物が」：Gallagher, 50.
- p.242 同じような毎日が：ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189; Gallagher, 50–51.
- p.243 「さあ帰ろうぜ」：Haukelid, 77.
 隊員たちの頭には：Myklebust, 126–28.
 ただし、ハウケリは：*Instruks for Bonzo*, December 18, 1942, NHM: FOIV, Box D17.
 「いい天気だね」：Gallagher, 51–52.
- p.244 「おまえのライフルは」：“Regler og forskrifter,” courtesy of Mia Poulsson.
 彼のチームの：ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189.
- p.245 「連中はまるで」：Ingstad, 156.
 次の谷をジグザグに：Poulsson, 20–22; Gallagher, 49–65; 著者によるスヴァイン・ヴェトレ・トラエへのインタビュー. この狩りのあらまきは *Assault in Norway* をもとに再現した。この本の著者 Gallagher はグラウス隊を救ったこの最初の狩りの成功について見事に描写しており、ポウルソンが詳細を提供したのは明らかである。
- p.250 次の日の夜は：Sæter, 75; Poulsson, 22–23.
- p.251 「あの娘が山に」：Poulsson, 24.
 いっぽうオスロでは：フェーリスに宛てた 1942 年 12 月 14 日付の書簡, VM: A-1108/Ak, Box 1. これは、シンナルラン、ヤーレン、スコーゲンの釈放を求めて交わされたノシユク・ヒドロ社とドイツ当局間の一連の書簡のうちの一通である。だがそれらはすべて拒絶された。
 つい先日も：Nøkleby, *Josef Terboven*, 242.
- p.252 毎週、純度九九・五パーセントの：Memorandum from N. Stephansen, June 1943, NHM: Box 10/SISA.
 木箱はノルウェーから：Schöpke Report, August 6, 1943, NB: G-341.
- p.253 「いざというときは」：Bemerkungen zum Schutz der We-Wi-Betriebe, December 20, 1942, RW 39/40, Barch-MA.
- p.254 一二月二七日の朝：Memo of “Arresterte funksjonarer og arbeidere ved våre bedrifter,” April 1, 1942, VM: A-1108/AK, Box 1.
 ムース湖畔から険しい斜面を：著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー; Skinnarland Notes,, ESP; Kjell Nielsen Remembrance,, NHM: Box 10B.
 「上等のステーキとパンケーキ」：1942 年 12 月 24 日付 ESD.
- p.255 一二月二七日：1942 年 12 月 27 日付 ESD; 著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー.
 なかにはいと：Poulsson, 116.

第 14 章 孤独で先の見えない戦い

- p.256 マーストランドの船は：Hauge, 122; Progress Report for SN Section for Period January 2–9, 1943, NHM: SOE, Box 3A.

- 「状況はいよいよ」：1943年1月6日付 LTD.
- クリスマス休暇のあいだ：1942年12月23日–1943年1月1日付 LTD.
- クリスマスの前に：バッサがトロンスターに宛てた1942年12月20日付の書簡, LTP.
- 「平和はすぐに」：バッサがトロンスターに宛てた1942年12月29日付の書簡, LTP.
- 「私たちはまあまあ元気です」：シッセルがトロンスターに宛てた1943年1月3日付の書簡, LTP.
- p.257 「大きくなって」：トロンスターがシッセルに宛てた書簡, LTP. 手紙の内容から、これは1942年のクリスマスからまもなくして書かれたものとわかる。
- ドイツの勢いを封じるべく：1942年12月16日付 LTD.
- ムッレル通り一九番地の：Skogen, 1–74. スコーゲンが体験したこのおぞましい状況における引用と描写はすべて彼の優れた回想録に由来する。彼がゲシュタポから受けた拷問の記憶は、ムッレル通り19番地とグリニ収容所を生き延びた多くの人々の記憶と一致する。
- p.262 「尋問強化」：Nøkleby, *Gestapo*, 59–65. Nøkleby がゲシュタポに関する自身の研究のなかで述べているように、これはドイツが実際に使った表現である。
- 一月九日：Statement of Oscar Hans, August 11, 1945, TNA: WO 331/383; Affidavit in Respect of the Case of Able Seaman R. P. Evans, TNA: WO 331/383; Statement of Alfred Zeidler, TNA: WO 331/383; Affidavit of Erik Dahle, TNA: WO 331/18; War Crimes—Operation Freshman (Trandum), November 28, 1945, TNA: WO 331/17; Interrogation of Wilhelm Esser, July 10, 1945, TNA: WO 331/386.
- 一月のまとも凍てつく朝：Poulsso, 124–25. このいつもの朝の場面はポウルソンが日記のなかで振り返ったものであり、この部分はその記述に由来する。具体的な日付は書いていないが、降下可能な1月の月相の時期であるのは明らかだ。
- p.264 「はっきりしない天気だね」：Poulsso, 125.
- ときどきフェッテルを：ポウルソン・レポート.
- p.265 シンナルランがオスロの情報筋から：Interrogation of Lt. Skinnarland, July 27, 1945, TNA: HS 9/1370/8; Helge Dahl, *Rjukan*, 284.
- 「天候はいまだ芳しくないが」：Message to Swallow, January 16, 1943., NHM: FOIV, Box D17.
- ときにはちょっとしたことで：Report from Claus Helberg, July 10, 1943, NHM: SOE, Box 23; ポウルソンへのインタビュー, IWM: 26625; ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624; Lauritzen, 63; Berg, 120–22.
- p.266 「お次はギャングの」：Lauritzen, 63.
- p.267 授業も詩も：ヘルバルグへのインタビュー, IWM: 26623.
- ハリファックス機の窓から：Haukelid, 15–16.
- ルンネバルグは空いた時間を：ルンネバルグ・インタビュー, モーラン; トロンスターがルンネバルグに宛てた1943年1月の書簡, TNA: HS 2/185; Rostøl and Amdal, 78.
- p.268 そしていま：ルンネバルグがトロンスターに宛てた1943年1月26日付の手書きの書簡, NHM: FOIV, Box D17; Air Transport Operation Report, January 23, 1943, TNA: HS 2/131; Summary of Meeting Gunnerside Abortive Sortie, January 26, 1943,

- TNA: HS 2/185; Letter from Flight Lieutenant Ventry to Captain Adamson, January 25, 1943, TNA: HS 2/185; Lunde, 92–93; Haukelid, 38; ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
「勤を頼りに」: Myklebust, 130.
- p.269 その晩 : Claus Helberg, “Report about Einar Skinnarland,” July 30, 1943, NHM: SOE, Box 23; ポウルソン・レポート; Poulsson, 120–22.
- p.270 「きわめて残念だが」: Message to Swallow, January 28, 1943, NHM: FOIV, Box D17.
「一月二九日」: ポウルソン・レポート; Poulsson, 129.
シンナルランが書き留めたのは : 1943 年 1 月 28 日–2 月 13 日付 ESD.
- p.271 次の待機期間が : ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624.
「いったい何の意味が」: Poulsson, 127.

第 15 章 嵐

- p.273 一月の降下が : Report on “Crispie,” TNA: HS 2/185; ルンネバルグがトロンスターに宛てた 1942 年 12 月 29 日付の書簡, NHM: FOIV, Box D17; ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
「ドイツ軍がオーストリア軍に」: Messages from Grouse, February 8–10, 1943, NHM: FOIV, Box D17.
- p.274 フレッシュマン作戦の一件のあと : Report from Rjukan, December 1942, TNA: HS 2/186; ポウルソン・レポート.
パウル・ロスバウト : Njølstad, 251–52; Kramish, 129 (『暗号名グリフィン』)
トロンスターがスパイに : Rosbaud Report, NB: Goudsmit Papers, III, B27, F42; Kramish, 188–89 (『暗号名グリフィン』); Per Dahl, *Heavy Water*, 164; Hinsley, 123–27.
- p.275 「爆弾、もしくは」: “On Memorandum of February 6th, 1943 submitted by N. Stephansen on the production of D20 of Norsk Hydro,” NHM: Box 10/SIS/A.
「ウラン爆弾の製造を」: Obituary of Njål Hole, written by Jomar Brun, VM: IA4FB, Box 13; ニョール・ホーレがトロンスターに宛てた 1943 年 1 月 19 日付の書簡, NHM: Box 10/SIS/A.
- p.276 テンプスフォード飛行場の : Most Secret Report of Operations Undertaken by 138 Squadron on Night February 16–17, 1943, TNA: HS 2/131; Haukelid, 81.
「それぞれ何を」: Bailey, 140.
ゲインズ・ホールに戻って : ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31; ルンネバルグ・インタビュー, モーラン.
「地上に降りて」: Myklebust, 132–33.
- p.277 「あと一〇分だ！」: Haukelid, 81; Rostøl and Amdal, 45.
- p.278 「中国に来ちまったかな」: Haukelid, 83.
隊員たちはさっそく : ルンネバルグ・インタビュー, モーラン; ルンネバルグ・レポート.

- p.279 「小屋に戻らないと」：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン。
- p.280 嵐はフェッテルをも：ポウルソン・レポート；ヘルバルグへのインタビュー，IWM: 26623。
ルンネバルグは壁にかかった：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン。
- p.281 だが無線装置も持っておらず：Gallagher, 70–71。
- p.282 「あいかわらずの天気」：ルンネバルグ・レポート。
そのさなかに：Gallagher, 71–72；ルンネバルグ・インタビュー，モーラン。
- p.283 「嵐が勢いをぶり返した」：ルンネバルグ・レポート。
ハルダンゲル高原を襲った嵐は：Ibid; Gallagher, 73。
- p.284 午後一時：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；Myklebust, 137–39; Haukelid, 84–85; Rostøl and Amdal, 80–81. この部分のすべての引用は、これらの情報源に由来する。これらの内容はおおむね一致している。
- p.287 ところがすぐに：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン。
- p.288 地図によれば：Haukelid, 86–87。
ハウケリが柔らかな雪を：Ibid., 88。
「リヴィングストーン博士ですよ」：Drummond, 69。
- p.289 その晩、男たちは：ポウルソンへのインタビュー，IWM: 27189。
「直輸入のタバコ」：Haukelid, 88。
- p.290 「このままハルダンゲル高原に」：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；ルンネバルグ・レポート。

第16章 練りに練った計画

- p.291 寝苦しい夜のあと：Orientering vedr. Gunnerside, December 11, 1942, NHM: FOIV, Box D17; ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；スールリー回想録；Haukelid, 97–104; Poulsson, 135–41; Lunde, 96–98; Berg, 125–26; Halvorsen, *Den Norske Turistforening årbok 1947*, Sæter, 84–86; ポウルソンへのインタビュー，IWM: 27189; ルンネバルグへのインタビュー，IWM: 27187; ルンネバルグ・レポート；ポウルソンへのインタビュー，IWM: 26625; ヘルバルグへのインタビュー，IWM: 26623; 1943年2月19日付 ESD; ポウルソンとルンネバルグの往復書簡，NHM: Box 25; ポウルソンとヘルバルグの往復書簡，NHM: Box 25; Notes from Poulsson, NHM: Box 25; ハウケリへのインタビュー，DIA: DJ 31. ここに挙げた多くの情報源をみれば、作戦の計画全般において誰が何を提案したかについては工作人員のあいだで長らく議論が続いてきたことがわかる。だがひとつだけはっきりしていることがある。それは、トロンスターが峡谷をわたる侵入ルートを提案し、成功の確率を最大限に高めたということだ。
- p.293 「それ食べられる？」：Haukelid, 95–96。
- p.294 二月二五日の木曜日：スールリー回想録；著者によるフィン・スールリーへのインタビュー。
「やあ君に会えて」：スールリー回想録。
- p.295 金曜日：ルンネバルグ・レポート；ヘルバルグへのインタビュー，IWM: 26623。

- p.296 さっそくヘルバルグが : Gallagher, 85–86; Poulsson Notes on Colonel Wilson’s Book, November 2003,, NHM: Box 25.
- p.297 「木が成長して」 : ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31; ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189; Poulsson Notes on *Blood and Water* (ダン・カーズマン『ナチ原爆破壊工作』水野谷とおる訳, 朝日新聞社) manuscript, NHM: Box 25; Orientering vedr. Gunnerside, December 11, 1942, NHM: FOIV, Box D17.
- p.298 基本的な設計は : Bericht über einen Versuch mit Würfeln aus Uran-Metall und Schwerem Eis, G-212, NB: Goudsmit Papers, III/B25/F16; Per Dahl, *Heavy Water*, 210; Nagel, 81–82.
「原子炉をつくって」 : Ermenc, 109–11; パウル・ハルテック教授へのインタビュー, DIA: DJ 29.
パウル・ハルテックが開発した : Letter from Harteck to Rust, June 26, 1942, Papers of Paul Harteck, Rensselaer Institute.
ディーブナーもまた : Sagasfos, 123; Letter from Rjukan Saltpeterfabriker, March 2, 1942, VM: Box 4F/D17/98; Notes on Irving Manuscript Draft, NHM: Box 10B; Harteck Report: “Besichtigung des Elektrolysewerkes Sinigo bei Meran,” December 1, 1942, DIA: DJ 29; Walker, *German National Socialism*, 119.
次の実験のために : Schöpke Report, August 3, 1943, NB: G-341; Nagel, 80–81.
- p.299 核分裂がもたらすであろう : Karlsch, 45–53, 126; Nagel, 42–44; Irving, 77, 125–26, 153–55; Walker, *German National Socialism*, 88. ナチスの原爆計画の終焉を告げたシュペーアとの 1942 年 6 月 4 日の会議については多くの記述がある。会議が反対の結果に終わっていたとしたら、ただちにこの計画にマンハッタン計画のような情熱が注がれ、ドイツの原爆開発が成功する見込みをはるかに高めていた可能性もある。とはいえ、1942 年 6 月以降もこの計画の開発緊急度 (DE) は依然として高く、すなわち物資と人材の提供において最高の優先順位がつけられ、もしも進歩が見られた場合には有り余るほどの有力な後援者が控えていた。
二月二七日土曜の : Halvorsen, *Den Norske Turistforening årbok 1947*, ヘルバルグへのインタビュー, IWM: 26623.
- p.300 「いけそうぞ」 : ヘルバルグへのインタビュー, IWM: 26623.
あとは、どうやって : ここでも著者は、ガンナーサイド作戦計画において誰が何を提案し、誰を支持したかについて見きわめるために、前述の原注 (p.291 寝苦しい夜のあと) に掲載した矛盾する大量の情報源を参照した。
- p.302 「ばか言え」 : Myklebust, 150–51; Rostøl and Amdal, 84–85.
同じ日の午後四時四五分 : 1943 年 2 月 27 日付 LTD.
「何もかも順調」 : Message from Swallow, February 25, 1943, NHM: FOIV, Box D17.
- p.303 カーハンプトン作戦は : Carhampton Report, January 25, 1943, TNA: HS 2/130; Herrington, 157–58; Hauge, 133–58.
オックフォードに着き : 1943 年 2 月 27 日付 LTD.
「諸君は総力戦を」 : Nøkleby, *Josef Terboven*, 240.
- p.304 フョースブーダーレンの小屋の : Haukelid, 104–5.

「おれたち同じクラス」：リリアン・タングスターへのインタビュー, KA; Rostøl and Amdal, 85.

p.305 「国王と祖国に」：リリアン・タングスターへのインタビュー, KA.

第17章 登る

p.306 午後八時：ルンネバルグ・レポート；ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；ポウルソンへのインタビュー，IWM: 27189; Draft of Rønneberg BBC Speech, TNA: HS 7/181; ハウケリへのインタビュー，DIA: DJ 31; ヘルバルグへのインタビュー，IWM: 26623; ポウルソンへのインタビュー，IWM: 26625; Haukelid, 102–8; Poulsson, 143–46; Gallagher, 96–110; Rostøl and Amdal, 86–88; Lunde, 99–102; Berg, 127–30; Myklebust, 150–57. 2月27日から28日にかけて実行されたガンナーサイド作戦当夜の経緯については、インタビューや回想録、報告書にて（言わずもがな書籍においても）幾度となく語られている。本章で著者はこれらの情報源にもとづいて自身の説明を導き出したが、そのほとんどは一次資料、もしくは当事者の回想に由来するものである。直接の引用やとくに出所の記載が必要な情報でないかぎり、本章においてこれ以上の参照は省略させていただく。

「自らの判断で」：ルンネバルグ・レポート.

S0E での：ルンネバルグ・レポート; Rigden, 252–61, 316–22.

p.310 「さあ出発だ」：Gallagher, 100.

p.311 男たちはおのれの：Ibid., 103–5.

p.313 そのころリューカンから：1943年2月27日付 ESD; Sæter, 86.

S0E のなかで：Sæter, 44–45.

シンナルランは、兄の：著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー.

p.314 ハウケリを先頭に：Haukelid, 108; ハウケリへのインタビュー，DIA: DJ 31.

p.315 作業員たちは再び：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン.

p.316 「数分で標的に」：Draft of Rønneberg BBC Speech, TNA: HS 7/181.

これをたどれば：ハウケリへのインタビュー，DIA: DJ 31.

p.317 「幸運を祈る」：Haukelid, 108.

「いい場所だな」：Gallagher, 109.

p.318 四人の作業員は：Drawing of Gunnerside Approach/Retreat by Jomar Brun, VM: JBrun, Box 6a.

「鍵がかかっている」：Lunde, 102.

第18章 破壊工作

p.319 ルンネバルグは地階のドアに：ルンネバルグ・レポート；ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；ポウルソンへのインタビュー，IWM: 27189; Draft of Rønneberg BBC Speech, TNA: HS 7/181; ハウケリへのインタビュー，DIA: DJ 31; ヘルバルグへのインタビュー，IWM: 26623; ポウルソンへのインタビュー，IWM: 26625; Haukelid, 102–8; Poulsson, 143–46; Gallagher, 96–110; Rostøl and Amdal, 86–88; Lunde, 99–102; Berg, 127–30; Myklebust, 150–57. 前章と同様に、ガンナーサイド隊による破壊

工作については、とくに詳細を明記する必要のないかぎりこれらの情報源に由来する。
ブリッケンドンペリーで：Brun, 71–72. ヨーマル・ブルンがケーブル用のダクトに関する情報を提供した。彼は一度、ケーブルを修理するため自らこのダクトを利用したことがあった。

- 「あったぞ」：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；Gallagher, 110.
- p.321 「関係者以外は」：Directions Report, November 15, 1942, NHM:FOIV, Box D17.
「手をあげろ！」：Rostøl and Amdal, 102–3; Gallagher, 112.
- p.322 「お気を付けろ」：Rostøl and Amdal, 103.
- p.324 「最初に二分のやつに」：Myklebust, 157.
「メガネはどこだ？」：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；Rønneberg, “Operation Gunnerside”(IFS Info, 1995).
- p.325 作業が終わりに近づくと：Extract from Report by Director Bjarne Nilssen, VM: JBrun, Box 6a.
- p.326 「階段をあげれ」：Rønneberg, “Operation Gunnerside” (IFS Info, 1995).
「おれたちの目的は」：ポウルソンへのインタビュー，IWM: 26625.
- p.328 「だめだ」：Poulsson, 147;ハウケリへのインタビュー，DIA: DJ 31.
「ピカデリー！」：Haukelid, 113.
- p.329 移動しながら：Myklebust, 162–63.
- p.330 そのころヴェモルクでは：Alf Larsen, Rapport over Hendelsen i Høykoncentreringsanlegget på Vemork 28. Febr. 1943, VM: JBrun, Box 17; Bjarne Nilssen, Vedr. Sabotage i tungtvannsanlegget på Vemork, March 1, 1943, NHM: Box 25.
「自分たちと同じく」：Ibid.
- p.331 背後でサイレンが：Bjarne Nilssen, P. M. Sabotasje Vemork, VM: JBrun, Box 6a; Rapport vedrørende anlegg for fremstilling av Tungt vann ved Vemork Vannstoff-fabrikk, Rjukan, September 14, 1943, NHM: FOIV, Box D17.

第19章 じつにあっばれな仕事ぶり

- p.334 道路脇の雪堤の：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン。
地元っ子のふたりは：Drummond, 87.
サイレンが鳴り続けるなか：Haukelid, 114–15; ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；ルンネバルグ・レポート；Halvorsen, *Den Norske Turistforening årbok 1970*.
- p.336 男たちは山腹に：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン。
ヘルバルグはまず：ヘルバルグへのインタビュー，IWM: 26623.
何か問題が起きた場合は：Gallagher, 127.
ほかの者は：Poulsson, 149–50.
- p.337 それでも寝袋のなかで：ポウルソンへのインタビュー，IWM: 26625。
突風が岩や尾根から：Poulsson, 150.
- p.338 爆破の報告を受けて：Rapport til her politimesteren I Rjukan, June 23, 1945. Papers of Bjørn Iversen.

- 工場に着くと : Bjarne Nilssen, p.m. Sabotasje Vemork, VM: JBrun, Box 6a; Bericht über Konsul Ing. E. Schöpkes Reise und Besprechungen, March 13, 1943, NB: G-341.
- テーブルに拳銃を置いて : ラーセンへのインタビュー, DIA: DJ 31.
- p.339 「ノルウェー語を話す」 : Bjarne Nilssen, P.M. Sabotasje Vemork, VM: JBrun, Box 6a; Bjarne Nilssen, Vedr. Sabotage i tungtvannsanlegget på Vemork, March 1, 1943, NHM: Box 25.
- 「厳しい強制措置」 : Til Rjukans befolkningt, February 28, 1943, VM: JBrun, Box 6a.
- p.340 「戦争経済にとって」 : Feindnachrichtenblatt Nr. 28 — 21.2. bis 9.3.1943, RW 39/44, Barch-MA; Irving, 166.
- ムッゲンターラーが援軍と : Bjarne Nilssen, P.M. Sabotasje Vemork, VM: JBrun, Box 6a; Report, Gunnerside, April 14, 1943, TNA: HS 2/186.ほとんどの歴史文献では、レディース (Rediess) 将軍とテアボーフェンが、1943年2月28日の破壊工作からほんの数時間後にはリューカンに到着していたとされる。とはいえニルッセンの報告書は彼らの存在にっさい触れておらず、その説明は細かい点まで網羅したものである。
- その翌日 : Falkenhorst Note, February 28, 1943, RW 39/43, Barch-MA.
- 「じつにあっばれな仕事ぶりだ」 : Message from Swallow, March 10, 1943, NHM: FOIV, Box D17.
- 「お宝の箱を」 : ラーセンへのインタビュー, DIA: DJ 31; ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31; Haukelid, 125–26; Gallagher, 131–33; Bjarne Nilssen, P.M. Sabotasje Vemork, VM: JBrun, Box 6a. このファルケンホルストによる訪問の記述は、これらの情報源をもとにまとめたものである。グラーゼとの会話等のやりとりにそれぞれわずかな違いがあるが、骨子はすべて同じである。
- p.342 作員と、彼らを助けた : Heinrich Himmler's Telephone Log, March 1, 1943, RG242, Roll 25, NARA. 以下も参照。Manuscript Notes, Irving, NHM: Box 10B.
- 工場に関しては : Letter from Eberling to OKHWa Forsch, March 2, 1943, NB: G-341.
- 「……がノシュク・ヒドロ社の」 : Swedish Home Service, March 1, 1943, TNA: HS 2/185.
- ナチスの原爆計画に : 1943年3月1日付 LTD.
- ロンドンに無線通信が : Hauge, 156.
- p.343 「高濃縮施設は」 : ルンネバルグ・レポート.
- p.344 「ウィルソン中佐と」 : Haukelid, 119.
- 「じゃあな、アーネ」 : Gallagher, 137.
- 五〇キロ近くスキーで : ポウルソンへのインタビュー, IWM: 27189; Poulsson, 156–57; Gallagher, 138–40. この場面のすべての引用と記述はこれらの情報源に由来する。
- p.347 無線装置一式と : 1943年3月2日–5日付 ESD. シンナルランは3月5日の日記でガンナーサイド作戦について触れているが、ただし“Operasjonene Gunnerside iorden”

と暗号の形をとっている(スペルミスの可能性もある)。おそらく“Operation Gunnerside in order (ガンナーサイド作戦は順調)”との意味だろう。彼の娘のマリエッレ・シンナルランが著者に書き送ってきたように、シンナルランが破壊工作の結果を知ったのはリーの地元の農家からであることが、この記載から暗示される。とはいえハウケリは、破壊工作の結果をシンナルランに伝えたときに彼には初耳だったと回想録ではっきり述べていることから、著者はハウケリの説を採用した。

凍った湖をわたり：Haukelid, 120–21.

p.348 「心配するな」：Ibid., 121.

さっそくハウグランが：1943年3月6日–11日付 ESD; ハウグランへのインタビュー, IWM: 26624. シンナルランの日記から、彼がこの日に知らせを受けたことは明らかだが、ロンドンへの第一報は10日まで送信されていない。この日と翌日に、シンナルランは無線の接続および発振器の問題について短く触れている。

「ドイツの奴ら」：Haukelid, 122.

三月七日の正午：ルンネバルグ・レポート.

p.349 スウェーデンへの撤退は：ルンネバルグ・インタビュー, モーラン; Myklebust, 166–69; Mears, 180–81.

p.350 翌日は風が：ルンネバルグ・レポート.

第20章 一斉捜査

p.352 ムツレル通り一九番地では：Skogen, 96–105; Report by Gunlsik Skogen, December 1, 1943, TNA: HS 2/174.

p.353 「これまでおまえに」：Skogen, 107.

「作戦は一〇〇パーセント成功」：Message from Swallow, March 10, 1943, NHM: FOIV, Box D17.

p.354 トロンスターはこの最後の：Hurum, 123.

「最高の仕事を」：Message to Swallow, March 10, 1943, NHM: FOIV, Box D17.

それから二日後：SOE and Heavy Water, March 1943, TNA: HS 2/185; Minutes of ANCC Meeting, March 12, 1943, TNA: HS 2/138; Myklebust, 201–2; SOE Progress Report, March 15, 1943, TNA: HS 8/223.

「ドイツは原子の」：Tronstad, Note on Heavy Water, March 18, 1943, LTP.

サー・ジョン・アンダーソンと：1943年3月15日付 LTD.

p.355 「イギリスがかつて栄華を」：Hauge, 157.

「もう存分に犠牲を」：1943年3月3–6日付 LTD.

すでに無線局をもつ：SOE Progress Report, March 15, 1943, TNA: HS 8/223; Njølstad, 222–24.

p.356 そうこうするあいだも：Precis of a Meeting between Professor Goldschmidt, Professor Tronstad, and Lt. Commander Welsh, March 15, 1943, LTP.

このデンマークの物理学者は：エリック・ウェルシュがトロンスターに宛てた 1943年1月16日付の書簡, LTP.

p.357 「心臓の音」：1943年3月18日付 LTD.

- 三月一三日：ルンネバルグ・レポート；ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；Myklebust, 173–88.このスウェーデンへの撤退は、ガンナーサイド作戦のなかでもとくに瞠目すべきものである。ルンネバルグが自身の報告書で詳しく語っているが、Gunnar Myklebust が書いたこの作戦員の伝記には、より優れた長期にわたる記録が綴られている。これら三点がここで描いた撤退のあらましの主たる情報源である。
- p.358 「みんなでスピードをあげて」：Rostøl and Amdal, 97–99.
月明かりのもと：ルンネバルグ・レポート；Mears, 182–85. 作戦員たちのサバイバル技術については、Mears が優れた洞察を提供している。
- p.360 「いまだ、行くぞ！」：ルンネバルグ・インタビュー，モーラン。
「なあ、おい」：Myklebust, 182–83.
夜の帳がおりると：ルンネバルグへのインタビュー，IWM: 27187；ルンネバルグ・インタビュー，モーラン；ルンネバルグ・レポート。
- p.361 幼いころクヌート・ハウケリは：Haukelid, 129；Interrogation of Knut Haukelid, July 25, 1945, TNA: HS 9/676/4.
「この戦争が終わったら」：Haukelid, 129–30.
- p.362 スコールブーの小屋を出てから：Ibid., 124–31.
- p.363 「村は安全じゃないぞ」：Berg, 137.
ヒェルストルブはすぐに：Report by Arne Kjelstrup, October 30, 1943, NHM: SOE, Box 23.
- p.364 ヴェモルクを襲った作戦員が：Report “Angår Aksjonen på Hardangervidda,” July 17, 1946, NHM: Box 10B；Report on the Interrogation of Major Ernst Lutter, July 5, 1945, NHM: Box 16；Tätigkeitsbericht AOK/Ic, April 1943, RW 39/44, Barch-MA；Ueland, 191–93；Helge Dahl, *Rjukan*, 291. 1943年3月から4月にかけての一斉捜査に参加した人数は2000人から1万2000人の幅がある。この混乱の主たる原因は、おそらくほぼ同時に三つの活動が展開されていたことにあると、これらに参加していたLutter少佐が説明している。正確な人数はいまだ判明していないが、Lutterによればハルダンゲル高原において3000人、高原の南部と西部でも同数の「さらに強力な部隊」、そしてノルウェー北部のトロンハイム近郊にも2000人が派遣されたという。
いっぽうクリスチャンセンという名の：ハウグラン・レポート；Lunde, 109.
「七人の男たちが」：Report, “Vemork kraftstasjon,” March 24, 1943, NHM: FOIV, Box D17.
- p.365 この高原が作戦の：Report, “Angår aksjonen mot Hardangervidda I tiden 23/3/ til 8/4/43,” NHM: Box 10B；Report, “Unternehmen Adler,” March 30, 1943, NHM: Box 10B；Technique of the Agent in the European Field, TNA: HS 2/229；Report by Arne Kjelstrup, October 30, 1943, NHM: SOE, Box 23；Ueland, 161–63；Kjelstadli, 264.
集中して捜査するのは：Report on the Interrogation of Major Ernst Lutter, July 5, 1945, NHM: Box 16；Report from Swedish Telegraph Agency, March 29, 1943, NHM: FOIV, Box D17；Report from Fenrik Haugland, September 23, 1943, NHM: SOE, Box 23.

第21章 原野の怪人

- p.367 ドイツ兵の姿が : Berg, 137–38.
「ドイツ野郎が」 : Drummond, 104.
パンを処分しなくては : Haukelid, 130–31.
優れた追跡者は : Ibid., 134.
- p.368 三月二五日の午後遅く : ヘルバルグへのインタビュー, IWM: 26623.
- p.369 ガンナーサイド隊とスワロー隊の : ポウルソン・レポート; スールリー回想録; Report, Claus Urbye Helberg, April 19, 1943, TNA: HS 2/186.
- p.370 ヤンスブーに戻った : ヘルバルグへのインタビュー, IWM: 26623; Report by Claus Helberg, June 28, 1943, NHM: SOE, Box 23; Interrogation of Sergeant Helberg, July 23, 1943, TNA: HS 9/689/6. 3月25日から30日にかけてのヘルバルグの波瀾万丈の脱出劇は、主としてこれら三点の情報源に由来する。著者は以下も参照した。Gallagher, 149–63; クラウス・ヘルバルグへのインタビュー, KA: Ueland, 194–201, 212–16. 引用およびその他の情報源については原注に別途記載する。
- p.371 「生まれ!」 : ヘルバルグへのインタビュー, IWM: 26623.
- p.373 「ここから逃げたほうが」 : Ibid.
- p.374 オスロ行き船は : ヘルバルグがダーレン滞在時に泊まったホテルについては、情報源のあいだに不一致がある。バンダーク (Bandak)・ツーリスト・ホテルとするものもあれば、ダーレン・ホテルだとするものもある。ダーレン・ホテルはこの町で最高級のホテルであり、まだドイツがここに本部を置いたことから、著者はダーレン・ホテルの説を採用した。
- p.375 そこで話題にのぼったのは : Letter from Wehrmachtbefehlshaber in Norwegen, May 15, 1943, RW 4/639, Barch-MA.
- p.376 「いいえ」と彼女が : Berit Nøkleby, “Uforskammet opptreden mot Terboven,” *Aftenposten*, February 25, 1983.
- p.377 「ほらね」 : Gallagher, 159.
- p.378 「おまえがあちにすわれ」 : Berit Nøkleby, “Uforskammet opptreden mot Terboven,” *Aftenposten*, February 25, 1983.
- p.380 「連日、君たちは」 : Report, “Aksjonen på Hardangervidda,” March 23–April 8, 1943, NHM: Box 10B.
隠してあった爆薬や : Wochenbericht für die Woche vom 29.3–4.4.43, RW 39/45, Barch-MA.
- p.381 ハムレフィエルの山地を : 1943年3月20日–4月20日付 ESD.
シンナルランとハウグランはニルスブーから : ハウグラン・レポート.
山腹にむき出しで : Skinnarland Notes, ESP; 1943年4月1–19日付 ESD.
何よりこの一帯の : Skinnarland, *Hva Som Hendte*, ESP.
- p.382 翌朝 : Haukelid, 137–39; 4月16–19日付 ESD; ハウグラン・レポート.
- p.383 シンナルランはてきばきと : ハウグラン・レポート; Sæter, 97–98.

第22章 国技

- p.384 一九四三年四月の半ば : Bericht über Konsul Ing. E. Schöpkes Reise und Besprechungen, March 13, 1943, NB: G-341; Rapport vedrørende anlegg for fremstilling av Tungt vann vad Vemork Vannstoff-fabrikk, Rjukan, September 14, 1943, NHM: FOIV, Box D17; Per Dahl, *Heavy Water*, 211–12; Bericht von Konsul Schöpke über die Besprechungen am 17. und 18.6.1943, NB: G-341.
「ノルウェーの国技」 : Letter from Ebeling to OKH Wa Forsch, March 2, 1943, NB: G-341.
とはいえノシュク・ヒドロ社の : Bjarne Nilssen, P. M. Sabotasje Vemork, VM: JBrun, Box 6a.
「迅速な決断」 : Letter from Ebeling to OKH Wa Forsch, March 2, 1943, NB: G-341; Olsen, 417.
必要な資源や人材は : Andersen, 400–404; Report, Gunnerside, April 15, 1943, TNA: HS 2/186.
ベルリンから秘密裏に : Bericht über Konsul Ing. E. Schöpkes Reise und Besprechungen, March 13, 1943, NB: G-341; Rapport vedrørende anlegg for fremstilling av Tungt vann vad Vemork Vannstoff-fabrikk, Rjukan, September 14, 1943, NHM: FOIV, Box D17; Per Dahl, *Heavy Water*, 211–12.
- p.385 この作業と並行して : Olsen, 417; Bericht Schutz von We-Wi-Betrieben, April 19, 1943, RW 39/45, Barch-MA.
- p.386 それから三週間後の : Niederschrift über die Besprechung am 7.5.1943 i.d. PTR, NB: G-341.
「ドイツの一般市民の」 : Karlsch, 162–63.
「ウラン爆弾」 : Abschrift, Allgemein verständliche Grundlagen zur Kernphysik, May 8, 1943, DIA: DJ 29.
そのほんの一日前に : Schriften der Deutschen Akademie DNR Luftfahrtforschung, NB: Goudsmit Papers, III/B27/F29.
エサウはドイツ国内で : Niederschrift über die Besprechung am 7.5.1943 i.d. PTR, NB: G-341.
- p.387 ディープナーのチームがつくった : Bericht über einen Versuch mit Würfeln aus Uran-Metall und Schwerem Eis. G-212, NB: Goudsmit Papers, IV/B25/F16; Irving, 174–75.
「小さすぎて」 : Niederschrift über die Besprechung am 7.5.1943 i.d. PTR, NB: G-341.
- p.388 ディープナーにはハルテックをはじめ : パウル・ハルテックへのインタビュー, NB: Oral History; Interview with Georg Hartwig, NB: Oral History.
「行動力にあふれ」 : Fine and Remington, 158.
「最低のクソ野郎」 : Nichols, 108.
- p.389 テネシー州の丘陵地には : Rhodes, 451, 486, 497(『原子爆弾の誕生』)
こうした仕事にも : Groves, 186–91(レスリー・R・グローブス『原爆はこうしてつくられた』富永謙吾・実松譲共訳, 恒文社)

- すると四月に : Private Cipher Message for Field Marshal Dill from C.A.S., April 7, 1943, NHM: FOII, Box 61.
- p.390 「あなたのおっしゃることは」 : Kurzman, 186 (『ナチ原爆破壊工作』)
「膨大な量」の : Preliminary Statement concerning the possibility of the use of radioactive material in warfare, July 1, 1943, TNA: CAB 98/47.
一九四三年六月二四日の朝 : Bush, Memorandum of Conference with the President, June 24, NA: Bush-Conant Papers; Powers, 210–11 (『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか』)
「敵への妨害対策に」 : Letter from James Conant to General Groves, December 9, 1942, NA: Bush-Conant Papers.
- p.391 「積極的に動いている」 : Bush, Memorandum of Conference with the President, June 24, 1943, NA: Bush-Conant Papers.
その夏の初めに : Haukelid, 149; 著者によるハウケリの家族へのインタビュー; Interrogation of Knut Haukelid, July 25, 1945, TNA: HS 9/676/4; Report by Arne Kjelstrup, October 30, 1943, NHM: SOE, Box 23; Report from Bonzo, NHM: SOE, Box 23.
- p.392 ハウケリとヒェルストルプは : Haukelid, 152; Berg, 142–43.
- p.393 建築作業の合間に : Interrogation of Lieutenant Einar Skinnarland, July 27, 1945, TNA: HS 9/1370/8; Skinnarland, *Hva Som Hendte*, ESP.
- p.394 「ボンゾーが待っていた」 : 1943年6月18–20日付 ESD.
ともに過ごしていた : アイナル・シンナルランがヒルヴィール・シンナルランに宛てた 1998年12月の書簡, ESP.
シンナルランはまだここに : 1943年6月28日–7月8日付 ESD; Skinnarland Notes, ESP.
「ヴェモルクは八月一五日ごろから」 : Message from Swallow, July 8, 1943, NHM: FOIV, Box D17.
- p.395 「この勇敢なる男たちに」 : Prime Minister's Personal Minute, April 14, 1943, TNA: HS 2/190.
今後ベルリンに再び : Report, “Lurgan,” July 4, 1943, LTP; ブルンがトマス・パワーズに宛てた 1988年10月11日付の書簡, VM: JBrun, Box 17.
- p.396 「ジュースの問題への対処」 : 1943年7月13日付 LTD.
- p.397 報告書のなかで : Tronstad, “Notat vedr. X,” July 19, 1943, NHM: Box 10/SIS B; Brun, 73–77.
七月二日 : トロンスターがウィルソンに宛てた 1943年7月16日付の書簡, DORA: Correspondence 1937–45.
その後、セルボーンは : 1943年7月21日付 LTD; Myklebust, 214–15; Poulsson, 160–63; ルンネバルグ・インタビュー, モーラン
- p.398 それから七十二時間もたたないうちに : Kjelstadli, 201–4; Olsen, 410–12; Sagasfos, 105–110.

第23章 標的リスト

- p.399 八月四日に : Report, "Meeting Held at Rjukan on the 4th August 1943," NHM: Box 10/SIS B; Olsen, 406, 418; Per Dahl, *Heavy Water*, 212.
- p.400 この六月には : Alf Larsen, Vemork production figures, DIA: DJ 31; ハルテックがデ
ィープナーに宛てた 1944 年 2 月 16 日付の書簡, NB: G-341.
「個人的な信念」: Report, "Meeting Held at Rjukan on the 4th August 1943," NHM:
Box 10/SIS B.
- p.401 それから数日のうちに : Kjelstadli, 260; Andersen, 422.
「通常の生産量」: Message from Swallow, August 4, 1943, NHM: SOE, Box 22.
- p.402 「慎重にやれば」: Message from Swallow, August 9, 1943, NHM: SOE, Box 22.
それから二週間にわたり : Messages from Swallow, August 7–22, 1943, TNA: HS
2/187.
夜が長くなり : 1943 年 7 月–9 月 ESD; シンナルランがダン・カーズマンに宛てた 1997
年 5 月 12 日付の書簡, ESP; 著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー.
- p.403 「でもぼくが撃ったのは」: 1943 年 9 月 16 日付 ESD.
このころシンナルランは : *Bergens Tidende*, February 1, 2015.
それでも家族とは : 1943 年 7 月 11 日–17 日付 ESD; 著者によるマリエッレ・シンナ
ルランへのインタビュー.
- p.404 「必要なあらゆること」: A・R・ボイルがウィルソンに宛てた 1943 年 8 月 9 日付の
書簡, TNA: HS 2/187.
「現地での行動」: Message to Swallow, August 10, 1943, including handwritten
comments from Tronstad and Wilson,, TNA: HS 2/187.
いよいよ今度こそ : Tronstad, Report with reference to attacks at Rjukan and
Vemork, TNA: HS 8/955/DISR.
その前年の一九四二年の後半には : Kjelstadli, 200–205.
- p.405 なかでもトロンスターは : Tronstad, "Notat vedr. X," July 19, 1943, NHM: Box
10/SIS B.
スウェーデンにいるトロンスターの若きスパイ : ホーレがトロンスターに宛てた 1943
年 9 月 1 日付の書簡, NHM: Box 10/SIS B.
- p.406 「戦争遂行にきわめて重要」: Stephensen Report, October 21, 1943, TNA: HS 2/187.
「私たちの国に再び」: トロンスターがシッセルに宛てた 1943 年 8 月 20 日付の書簡,
LTP.
- p.407 シッセルに手紙を書いて : 1943 年 8 月 20 日付 LTD.
「私が提案するのは」: Perrin Report, "Norway and Production of Heavy Water,"
August 20, 1943, TNA: AIR 8/1767.
「おれの名はクヌート」: Haukelid, 169; 著者によるハウケリの家族へのインタビュ
ー.
- p.408 「忘れるな」: Interrogation of Knut Haukelid, July 25, 1945, TNA: HS 9/676/4;
Report by Bonzo, via Arne Kristoffersen (Kjelstrup), October 1943, NHM: SOE,
Box 23.

- 一度だけ : Berg, 143–44.
- p.409 「六人の専業主婦」 : Request for Packing of Stores in Containers, Swallow Two, August 24, 1943, TNA: HS 2/131.
九月二日の真夜中過ぎ : Operational Report, Swallow Two, September 21/22, 1943, TNA:HS 2/131.
「やあ、どうだった？」 : Haukelid, 157.
- p.410 ハウケリとヒェルストルプは : Ibid.; Report, Swallow Two drop, November 18, 1943, TNA: HS 2/131.
とはいえ腹が満たされても : Berg, 141, 144–47.
それから二週間ほどたち : Haukelid, 158; 1943年10月13日付 ESD.
- p.411 シンナルランはハウケリ : Skinnarland Note, ESP.
「お偉方が」 : Letter from Lt. Colonel Sporborg to Brigadier Mockler-Ferryman, October 5, 1943, TNA: HS 2/218; Tube Alloys Technical Committee Meeting, September 19, 1943, TNA: CAB 126/46; Letter from L. C. Hollis to CAS (Chief of Air Staff, Sir Charles Portal), October 18, 1943, TNA: AIR 8/1767.
- p.412 シンナルランの送った情報をもとに : Report, Heavy Water Production at Vemork, October 16, 1943, TNA: HS 2/218.
この報告書を盾に : Letter from L. C. Hollis to Sir Charles Portal, October 18, 1943, TNA: AIR 8/1767; Letter from Sir Charles Portal to L. C. Hollis, October 20, 1943, TNA: AIR 8/1767.
ロンドンから西に車で : Parton, 155.
「われわれは連中を」 : Ibid., 130.
ところがグローヴズは : Groves, 189 (『原爆はこうしてつくられた』)
「ノルウェーの攻撃が」 : Kurzman, 188 (『ナチ原爆破壊工作』) ; Letter from Sir Charles Portal to Brigadier Hollis, October 20, 1943, TNA: AIR 8/1767.
- p.413 こうした駆け引きが : Report with Reference to Attacks at Rjukan and Vemork, TNA: HS 8/955/DISR.
「特別なやり方によって」 : Njølstad, 264–65.
「攻撃的、破壊的なものから」 : Minutes of the 24th ANCC, November 11, 1943, TNA: HS 2/138.

第24章 カウボーイの疾走

- p.414 一九四三年一月一六日 : オーウェン・ローンへのインタビュー, KA.
同じころ : Freeman, 7–15.
- p.415 標的までの距離と : Roane, 96.
「特殊な爆薬」 : オーウェン・ローンへのインタビュー, KA.
「ただの偵察飛行」 : Bennett, 15.
ローンは二歳の誕生日を : オーウェン・ローンへのインタビュー, KA; Roane, 1–14.
- p.416 第八空軍の平均寿命は : Harry Crosby, Jan Riddling, and Michael P. Faley, “History of the 100th Bomb Group,” 以下で閲覧できる。United States Air Force Military

- Heritage Database, http://www.8thairforce.com/legacy_100thbomb.htm.
 シュトゥットガルトへの出撃では : Roane, 29–80.
- p.417 「凍ったロバと」 : Michael Faley, “Owen Roane: The Last Cowboy,” *Splasher Six 29* (Fall 1998).
 午前五時、ローンは : Freeman, 16–18, 244–45.
 整備主任が : Roane, 95–101. ローンの著書には、飛行大隊指揮官ベネットと機長ローン、さらに航法士、爆撃手、第三師団指揮官の報告も掲載されている。
 「これで出撃準備完了！」 : オーウェン・ローンへのインタビュー, KA.
- p.418 互いの救命胴衣と : Roane, 95–101.
- p.419 その朝 : Bomber Command Narrative of Operations, 131st Operation, November 16, 1943, TNA: AIR 40/481.
 しばらく旋回を : Bennett, 16–21.
 ローンたちは : Ibid., 17.
- p.420 「北海上空で」 : Kurzman, 197 (『ナチ原爆破壊工作』). 第8空軍によるヴェモルク襲撃についての歴史文献においては、とりわけダン・カーズマンが機長や搭乗員にインタビューをおこない、11月16日の経緯を徹底的に解説することで優れた仕事をしている。
 別の航空群に : Ibid., 19–20.
- p.421 総勢一七六機の : Bomber Command Narrative of Operations, 131st Operation, November 16, 1943, TNA: AIR 40/481.
 そのころヴェモルクの : Haukelid, 177; 1943年11月16日付 ESD.
- p.422 午前一時三三分 : Nielsen, Kjell, “Notat angående omtalen av fergeaksjonen på Rjukan I Februar 1944,” NHM: Box 10B.
 「もっとたくさんの」 : Rapport fra luftvernlederen ingeniør Fredriksen over flyangrepet på Vemork Kraftstasjon og Vemork Fabrikkompleks, November 16, 1943, VM: A-1108/AK, Box 1.
- p.423 「みんな走って家に」 : Report by Unnamed Witness, KA.
 先行していた : Mears, 95–101; Bomber Command Narrative of Operations 131st Operation, November 16, 1943, TNA: AIR 40/481; Quotes on Tuesday’s 8th AAF Heavy Bomber Operations, November 16, 1943, TNA: AIR 2/8002.
- p.424 全部で七一一発の : Bomber Command Narrative of Operations, 131st Operation, November 16, 1943, TNA: AIR 40/481; Report, “Norway: Result of USAAF raid on Rjukan, Vemork,” December 28, 1943, TNA: AIR 40/481.
- p.425 爆撃機の大半が : Attack on Fertilizer Works at Rjukan by USAAF, December 9, 1943, TNA: AIR 2/8002; 8th Air Force Command Provisional Report, November 18, 1943, TNA: AIR 40/481.
 「なんてこった！」 : Kurzman, 202 (『ナチ原爆破壊計画』)
 ニールセンは以前に : Ibid., 202–4; Nielsen, Kjell, “Notat angående omtalen av fergeaksjonen på Rjukan i Februar 1944,” NHM: Box 10B.
- p.426 そこから六キロあまり : Ømkomme under bombing, November 16, 1943, VM:

A-1108/AK, Box 1; Olsen, 419.

親衛隊将校ムグエンターラーは : Letter from Muggenthaler to Befehlshaber der SS und des SD, November 17, 1943, R70/32, Bundesarchiv, Berlin.

p.427 「SH-200 高濃縮施設」 : Fernschreiben an dan Chef der Sicherheitspolizei und des SD, Kaltenbrunner, November 18, 1943, R70/32, Bundesarchiv, Berlin.

第 25 章 犠牲はつきもの

p.430 アメリカ軍による空爆が : Njølstad, 274–75.

「ノルウェー人の犠牲者が」 : 1943 年 11 月 16 日付 LTD.

連合軍は約束を : Notat vedrørende angrenpene på Rjukan og Vemork, November 16, 1943, NHM: Box 10/SIS B.

p.431 「一年ほど前に」 : Hagen (ブルン) がペリンに宛てた 1943 年 11 月の書簡, VM: JBrun, Box 2.

スコットランドから戻った : Aide-Memoire, “The bombing of industrial targets in Norway,” TNA: AIR 2/8002; Notat vedrørende angrenpene på Rjukan og Vemork, November 16, 1943, NHM: Box 10/SIS B; Letter from Trygve Lie, January 29, 1943, TNA: AIR 2/8002; Letter from A. W. Street, December 22, 1943, TNA: AIR 2/8002. このフォルダー内にはきわめて参考になる一連の書簡が含まれており (Air Attacks on Targets in Norway, TNA: AIR 2/8002), 英米ノルウェー当局間の紛糾に興味のある方には然るべき出発点になるだろう。

p.432 一二月に届いた : ホーレがトロンスターに宛てた 1943 年 12 月 16 日付の書簡, LTP.

「途方もない破壊力を」 : 1943 年 11 月 5 日付 LTD.

「重水生産を完全に」 : Cable from S. D. Felkin, December 22, 1943, TNA: HS 2/187. だがこの未確認情報で : Notat vedrørende angrenpene på Rjukan og Vemork, November 16, 1943, NHM: Box 10/SIS B.

p.433 「あなたが行ってしまってから」 : Njølstad, 270–71.

「ぼくが心から願うのは」 : トロンスターがバッサに宛てた 1943 年 8 月 23 日付の書簡, LTP.

「この世は代償なくして」 : トロンスターがバッサに宛てた 1943 年 12 月 8 日付の書簡, LTP.

「ほかの人間の生き死にを」 : 1943 年 4 月 30 日付 LTD. これとほぼ同じ思いを、彼のイギリス人の同僚 Malcolm Munthe も吐露している。Munthe が 1943 年 5 月 3 日にトロンスターに送った手紙にはこう書かれている。「貴殿もおそらくおわかりかと存じますが、ノルウェーの友人たちを現地に送り出す際にとりわけ私が切に感じるのは、私自身もいま一度、実戦の場で貢献する努力をすべきだということです」。Munthe がトロンスターに宛てた 1943 年 5 月 3 日付の書簡, DORA: Correspondence 1937–45.

p.434 一九四三年の一月から : Walker, *German National Socialism*, 100–102.

開発中の G-III の : Bericht über die Neutronenvermehrung einer Anordnung von Uranwürfeln und Schwerem Wasser (GIID), Deutsches Museum Archiv; Nagel, 90–92; Irving, 190–92.

- 「装置の規模が」: Bericht über die Neutronenvermehrung einer Anordnung von Uranwürfeln und Schwerem Wasser (GIII), Deutsches Museum Archiv.
- さっそくチームは : Bagge and Diebner, 35.
- ディーブナーの成功は : ゲーリングがエサウに宛てた 1943 年 12 月 2 日付の書簡, NB: Goudsmit Papers, III/B27/F30; Per Dahl, *Heavy Water*, 219.
- p.435 背が高く : Irving, 200; Per Dahl, *Heavy Water*, 220–21.
- 「物理学の皇帝」: Karlsch, 104–5.
- p.436 「私が思うに」: Nagel, 94.
- 一九四四年一月一日の : Karlsch, 106; Walker, *German National Socialism*, 130–31.
- 一九四三年二月一日 : Protokoll über die in Norsk Hydro Buro, Oslo, December 11, 1943, NB: G-341.
- 「従業員をこれ以上」: Protokoll über die in Norsk Hydro Buro, Oslo, December 11, 1943, NB: G-341.
- p.437 またそれとは別に : Mark Walker and Rainer Karlsch, “New Light on Hitler’s Bomb”(*Physics World*, June 1, 2005); Nagel, 92–93; Irving, 213–17. ディーブナーがこの目的に取り組んでいたことはほぼ間違いない。それよりも論議の的となるのは、その試みが成功したか否かという点である。Irving はその答えを回避したが、Karlsch は著書のなかでディーブナーとそのチームがこうした兵器の実験に成功したと主張する。彼らの実験の成否に関わらず、著者は Karlsch/Walker の論文の以下の主張に同意する。すなわち「重要なのは、戦争末期の切羽詰まった数カ月に研究を続けていたひと握りの科学者たちが、その実現に向けて実際に努力していたという驚くべき事実である」
- 「ぼくらの友人全員が」: Messages from/to Swallow, December 19, 1943–January 1, 1943, NHM: SOE, Box 22.
- p.438 バムセブーにこもった : Haukelid, 171–72; 1943 年 12 月 25 日–1944 年 1 月 1 日付 ESD.
- ハウケリもまた : Ording, 255; Haukelid, 159.
- p.439 ふたりはいまや : 著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー.
- 「わけわからねえ」: Haukelid, 166–67.
- p.440 こうした口喧嘩は : Ibid.; 著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー.
- 「ヴェモルクで重水生産用の」: Njølstad, 288–89; Message from London, January 29, 1943, TNA: HS 2/188.
- p.441 アメリカ軍による空爆は : Report on Rjukan, January 1, 1944, TNA: HS 2/188.
- 「秘密の兵器炉」: Translation of Extract from Swedish Newspaper, “Brilliant Coup Against Hitler’s Secret Weapon,” November 23, 1943, TNA: HS 2/188.
- スールリーと同様に : スールリー回想録.
- p.442 ヴィーテンはスールリーに : Ibid.; 1943 年 1 月 30 日付 ESD.
- 風があまりに強くて : スールリー回想録.

第 26 章 五キロの魚

- p.443 一九四四年二月一日 : Rolf Sørliie, Report on Milorg at Rjukan, May 12, 1944, NHM: SOE, Box 23; スールリー回想録; Løken, 102; Drummond, 152; Report by Sheriff Foss, January 1944, NHM: SOE, Box 23.
- p.444 高濃縮電解槽に : Interrogation of Gunnar Syverstad, April 5, 1944, TNA: HS 2/188. 翌日 : スールリー回想録.
スールリーはミロログならびに : Message from Swallow, February 2, 1943, NHM: Box 10/SIS B.
- p.445 「いつもこんな」 : スールリー回想録.
とうとう動員命令に : Message from Swallow, February 3, 1943, TNA: HS 2/174.
- p.446 「奴らに会ったか?」 : Haukelid, 178.
スールリーの報告によれば : Rolf Sørliie, Report on Milorg at Rjukan, May 12, 1944, NHM: SOE, Box 23; Message from Swallow, February 5, 1944, TNA: HS 2/174.
- p.447 「おそらく輸送路を」 : Message from Swallow, February 6, 1943, NHM: SOE, Box 23.
スールリーは輸送に関する : Haukelid, 181.
この一週間というもの : 1944年2月6日付 LTD.
ここ一週間 : Njølstad, 298-99; Messages to/from Swallow, February 1-7, 1943, NHM: SOE, Box 23.
- p.448 結局、ノルウェー軍最高司令部の : トロンスターがウィルソンに宛てた 1944年2月7日付の書簡, TNA: HS 2/188; 1942年2月7日付 LTD; ウェルシュがトロンスターに宛てた 1944年2月8日付の書簡, LTP.
「われわれはできるかぎり」 : Message to Swallow, February 8, 1944, TNA: HS 2/188.
- p.449 「われわれは精いっぱい」 : 1943年2月7日付 LTD.
「アイナル、起きてるか?」 : Drummond, 156.
- p.450 まもなくスールリーが : Haukelid, 182-83; Account given by Engineer Larsen of the transaction during the attack on Tinnsjø Ferry, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23.
- p.451 まずは、重水が : Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry Hydro, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; Account given by Engineer Larsen of the transaction during the attack on Tinnsjø Ferry, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23. このふたつの報告は、さまざまな選択肢について考慮した過程を最もよく要約している。同じ詳細がハウケリの回想録をはじめ他の多くの情報源においても認められる。
- p.452 そしてニルスブーでは : Message from Swallow, February 9, 1943, NHM: SOE, Box 23; 著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー; Skinnarland Notes, ESP.
「フェリーを沈めることを」 : Message to Swallow, February 10, 1943, NHM: SOE, Box 23.
- p.453 「全部知っておかなくちゃ」 : スールリー回想録.
手紙を読んだハウケリは : 著者によるハウケリの家族へのインタビュー; Haukelid,

- 182; スールリー回想録; Message from Swallow, February 12, 1943, NHM: SOE, Box 23; Letter to SNA, February 17, 1944, NHM: SOE, Box 23B.
- p.454 二月一三日 : 1944年2月13日付 ESD; スールリー回想録.
農場に着いたハウケリたちに : Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry *Hydro*, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; スールリー回想録.
- p.455 翌日の二月一五日 : Kjell Nielsen, "Notat angående omtalen av fergeaksjonen på Rjukan i Februar 1944," NHM: Box 10B; Interrogation of Gunnar Syverstad, April 5, 1944, TNA: HS 2/188; Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry *Hydro*, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23.
- p.456 「作戦の効果」 : Message from Swallow, February 16, 1944, NHM: SOE, Box 23.
それからふたりが : Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry *Hydro*, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; スールリー回想録.
- p.457 その晩、夕食が終わると : スールリー回想録.
二月一六日 : 1943年2月16日付 ESD.
「この件について」 : Message to Swallow, February 16, 1943, NHM: SOE, Box 23.
シンナルランはこの命令が : 著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー; Skinnarland Notes, ESP; Haukelid, 185–86.

第27章 ヴァイオリンをもつ男

- p.459 翌日 : アルフ・ラーセンへのインタビュー, DIA: DJ 31; クヌート・ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31.
「つらいのはよくわかる」 : Drummond, 160.
そのうち何人かは : Haukelid, 187.
- p.460 ハウケリは話を : Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry *Hydro*, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23.
「時限爆弾を船に」 : Ibid.
次に、作戦を : Kjell Nielsen, "Notat angående omtalen av fergeaksjonen på Rjukan i Februar 1944," NHM: Box 10B; Interrogation of Gunnar Syverstad, April 5, 1944; Account given by Engineer Larsen of the transaction during the attack on Tinnssjø Ferry, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; スールリー回想録.
- p.461 デーセトはこぢんまりした : Diseth, Friends Report, NHM: SOE, Box 23B; Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry *Hydro*, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; Gallagher, 175–76.
その翌日 : ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31.
- p.462 連絡船「蒸気船ヒドロ号」 : Payton and Lepperød; Interrogation of Gunnar Syverstad, April 5, 1944, TNA: HS 2/188; Irving, 203.
- p.463 ハウケリが船に乗り込むと : Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry *Hydro*, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; Haukelid, 187–88; ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31; ハウケリへのインタビュー, IWM: Oral History.
- p.465 ニ七歳の元ノルウェー陸軍軍曹 : クヌート・リーエル＝ハンセンへのインタビュー,

KA; Report by Gunlsik Skogen, December 1, 1943, TNA: HS 2/174; Knut Lier-Hansen, Friends Report, NHM: SOE, Box 23B.

ハウケリはひと目見て : Haukelid, 189. リーエル=ハンセンがいつ仲間に加わったかについては、いくらか不透明な部分がある。本人のインタビューでは、すでに2月10日には自分はかなり中心的な立場にいたと述べているが、これは他のほとんどの説明と食い違っており、それらによると彼は最後の段階になってから参加したとされている(これはメンバーがまだひとり足りないことへの懸念とも合致する)。スールリーとハウケリはともにこの説を語っている。集まった証拠からみて、2月18日に参加したというのが最も可能性の高い筋書きである。ハウケリは作戦後の報告でこの日に彼に会ったと明確に述べており、またリーエル=ハンセンのことは、ラーセン、シーヴェルスター、あるいはニールセンが参加したそれ以前の日付のどの会議においても言及されていない。

p.466 「粉碎し」 : Larsen, 1242-49.

「ドイツへの抵抗に」 : Ibid., 1249-50.

p.467 またフェーリスは : Irving, 205-6.

二月一八日 : 1944年2月18日付 LTD.

スワロー隊から届いた : マイケル・ペリンに宛てた 1944年2月15日付の書簡, TNA: HS 8/955/DISR.

p.468 フェリーの爆破計画について : 1944年2月10日付 LTD.

ブルンからは : Brun, 85-86.

ウィルソンはオスロー帯で : John Wilson, "On Resistance in Norway," NHM: Box 50A; マイケル・ペリンへのインタビュー, DIA: DJ 31.

散歩を終えた : 1944年2月18日付 LTD.

パンツという音が : Haukelid, 188.

p.469 「とりあえず使えるね」 : Drummond, 162.

爆発時間を遅らせる : Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry *Hydro*, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; Gallagher, 176; ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31.

p.470 そのころヴェモルクでは : ウェルシュに宛てた 1944年3月20日付の書簡, TNA: HS 2/188.

「目的地は不明だ」 : Account given by Engineer Larsen of the transaction during the attack on Tinnsjø Ferry, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23.

第28章 午前一〇時四五分のベル

p.472 真夜中近くに : Haukelid, 191; Message from Swallow, March 30, 1944, NHM: Box 10.

ふたりの職員は : ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31; ラーセンへのインタビュー, DIA: DJ 31.

p.473 「このポンコツめ！」 : Drummond, 165.

「参ったな」 : Kurzman, 224 (『ナチ原爆破壊工作』)

- すでにこの町の : Gallagher, 179.
- 雪に覆われた道路を : Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry *Hydro*, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; ハウケリへのインタビュー, DIA: DJ 31; クヌート・リーエル=ハンセンへのインタビュー, KA; Haukelid, 191-93; Drummond, 167-70; Gallagher, 179-82; Account given by Engineer Larsen of the transaction during the attack on Tinnsjø Ferry, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; スールリー回想録. とく原注に記載した引用を除き、ヒドロ号への爆薬設置のくだりはこれらの情報源に由来する。
- p.476 「やあ、クヌートじゃないか?」: Gallagher, 181; Haukelid, Report on the Sinking of the Ferry *Hydro*, February 20, 1944, NHM: SOE, Box 23; Sikkerhetspoliti Rapport av John Berg, February 21, 1944, NHM: Box 10B.
- p.478 「おれもすぐに戻るからな」: Drummond, 171.
二月二〇日 : Vedr. D/F *Hydro* forlis February 20, 1944, VM: IA4FB, Box 13; Irving, 209.
そのころリューカーンの実家にいた : 著者によるリリアン・ガブルエルソンへのインタビュー.
- p.479 「あいつはリューカーンにいる」: Haukelid, 195.
- p.480 そのころマールを見おろす : リーエル=ハンセンへのインタビュー, KA.
アーレン・スーレンセン船長は : Raport Sørensen, February 21, 1944, VM: IA4FB, Box 13; Gallagher, 184.
午前一〇時四五分になる直前 : Raport Sørensen, February 21, 1944, VM: IA4FB, Box 13; *Aftenposten*, February 23, 1944, TNA: HS 2/188; *Fritt Folk*, February 23, 1944, TNA: HS 2/188; *Rjukan Dagblad*, February 22, 1944, TNA: HS 2/188; エーヴァ・グルブランセンへのインタビュー, KA; Omkomne D/F *Hydro*, February 20, 1944, VM: IA4FB, Box 13.
- p.481 「陸に向けて舵を切れ!」: Raport Sørensen, February 21, 1944, VM: IA4FB, Box 13.
「爆弾だ!」: エーヴァ・グルブランセンへのインタビュー, KA.
- p.482 「おれにどうしろってのか」: Ibid.
「フェリーに乗っていた五三人のうち」: Haukelid, 197; Omkomne D/F *Hydro*, February 20, 1944, VM: IA4FB, Box 13. その日、フェリーに乗っていた正確な人数は、切符係——および彼の記録——が沈没時に行方不明になったため、いくらか曖昧なままである。最終的な数字は戦後にクヌート・ハウケリが、ノルウェーにおける軍政長官の記録から見つけた情報報告書に由来する。
- p.483 ロルフ・スールリーは日曜の大半を : スールリー回想録.
ぼくはなんてことを : Ibid.
- p.484 ハーマレンのもとに : 1944年2月21日付 ESD.
ニルスブーに戻るや : Message from Swallow, February 22, 1944, NHM: Box 10/SIS B.
- p.485 「おまえがもし消えたなら」: Interrogation of Gunnar Syverstad, March 25, 1944,

NHM: Box 10.

ゲシュタポが到着したとき : Sikkerhetspoliti Rapport av John Berg, February 21, 1944, NHM: Box 10B; Gudbrandsen, Rapport til Lederen av Statspolitiet, February 23, 1944, NHM: Box 10B.

- p.486 クヌート・ハウケリが : Haukelid, 195–202; 著者によるハウケリの家族へのインタビュー。
- p.487 一九四四年二月二六日 : 1944年2月26日–3月7日付 LTD.
- p.488 ヴェモルクについては : 1944年4月13日付 LTD.

第29章 勝利

- p.489 一九四四年の三月も末になると : Irving, 217–19.
「厳しい状況」 : Bericht uber die Arbeiten auf Kernphysikalischen Gebiet, NB: Goudsmit, IV/B25/F13.
- p.490 「必ずや近いうちに」 : Karlsch, 166–67.
七月には五六七機の : 1944年5月12日付 LTD.
八月にアメリカ陸軍情報将校の : Irving, 246–47, 258–60; Alsos Mission Report, DIA: DJ 31.
- p.491 「ドイツは原爆を持っておらず」 : Goudsmit, 71 (サムエル・A・ハウトスミット『ナチと原爆——アルソス科学情報調査団の報告』山崎和夫・小沼通二訳, 海鳴社)
連合軍機の機銃掃射を : Interview with Georg Hartwig, NB: Oral History; Nagel, 129–30; Cassidy, 496 (『不確定性』)
- p.492 一九四四年六月一五日 : 1944年6月10日 LTD.
つい一週間ほど前に : Njølstad, 331–35.
「全項目で優等」 : Finishing Report, STS 17, DORA: Correspondence 1937–45.
まずはイエンス = アントン・ポウルソンが : Report of Operation Sunshine, TNA: HS 2/171.
- p.493 「主要な産業関連の攻撃目標」 : Appendix A, Sunshine Action Plans, NHM: Box 10C.
八月二七日、自分に : トロンスターがバッサに宛てた 1944年8月27日付の書簡, LTP.
「私の日記を」 : Speech by Gerd Hurum Truls, October 10, 1987, LTP.
「長い流浪の日々」 : 1944年8月27日付 LTD.
ともにパラシュートで降りてきた : Njølstad, 358.
それから五ヶ月のあいだ : Report of Operation Sunshine, TNA: HS 2/171.
- p.494 三月一日の夜 : Skinnarland Report on the Deaths of Major Tronstad and Sergeant Syverstad, March 16, 1945, TNA: HS 2/171; Njølstad, 410–24.
- p.496 動員令は : Report of Operation Sunshine, TNA: HS 2/171; Herrington, 283–85; Military Homefront Survey, December 1, 1944, NHM: SOE, Box 4.
- p.497 その晩、スカウグムの : Nøkleby, *Josef Terboven*, 291–93.
ハインリヒ・フェーリスは : Klykken, Frits, “Saken Fehlis,” Porsgunn Folkebibliotek.
ドイツの降伏からひと月後 : Colonel Wilson, Diary of a Scandinavian Tour, TNA: HS 9/1605/3.

- 「幾度となく状況は」：*Chicago Tribune*, June 8, 1945.
- p.498 一九四五年六月二三日：Skinnarland, *Hva Som Hendte*, ESP; Freds Og Midtsommerskal, June 23, 1945, ESP.
祝宴から一週間後の：Colonel Wilson, *Diary of a Scandinavian Tour*, TNA: HS 9/1605/3.
- p.499 八月前半になると：Njølstad, 426–29.
「愛しいバッサへ……ぼくは」：トロンスターがバッサに宛てた 1944 年 8 月 27 日付の書簡, LTP.
- p.500 ケンブリッジ郊外にある：Powers, 434–35 (『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか』)；Bagge and Diebner, 51–55.
- p.501 「ひどく打ちのめされ」：Frank, 70.
「ニュースです」：Bernstein and Cassidy, Appendix C.
- p.502 「ウラン同位体を分離したからこそ」：Ibid., 115–18.

エピローグ

- p.504 「どちらか一方の実験が」：R. V. Jones, “Thicker Than Heavy Water,” *Chemistry and Industry*, August 26, 1967.
- p.505 「ノルウェーで重水の生産が」：Bagge and Diebner, 35.
「われを愛した者の」：Drew, 205.
「残されたわれらは」：Ibid., 222.
- p.506 それでも、戦時において：この結論は、これら個人の回想録やインタビュー、日記から著者が導き出したものである。ポウルソンやルンネバルグのように、なかにはこの点を明白に述べている者もいる。
- p.507 アイナル・シンナルランの子どもたちは：著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー。
「自然を前にした人間の」：ルンネバルグへのインタビュー, IWM: 27187.
クヌート・ハウグランは：著者によるハウグランの家族へのインタビュー。
- p.508 「父は理由もわからずに」：著者によるハウケリの家族へのインタビュー。
シンナルランが戦ったのは：著者によるマリエッレ・シンナルランへのインタビュー。
- p.509 「自由のためには」：“If Hitler Had the Bomb,” transcript from documentary at the Norsk Industriarbeidermuseum, Vemork.

参考文献

一見すると参考文献とは、一次的あるいは二次的な情報源をただ無味乾燥に並べたものに見えることも多い。以下のリストは、本書のリサーチをするうえで——ライフ・トロンスターとアイナル・シンナルランの日記を見つけ、SOE の極秘文書に目を通し、工作人員の家族にインタビューをおこない、戦時におけるジョン・ウィルソン中佐、ロルフ・スールリー、そしてシンナルランの家族にまつわる未公開の資料を入手する過程で——著者が味わった興奮を存分に伝

えるものではない。調査の過程で著者は、英語、ノルウェー語そしてドイツ語で書かれた数多の本に目を通し、その多くを以下に挙げた。だが本書の大部分は、主要な登場人物の回顧談やインタビュー、回想録、さらにはこの一連の出来事がまさに起きた時点で書かれた書簡や通信文、作戦報告書、日記、その他の記録文書から成るものである。

保管文書・アーカイブス

アメリカ合衆国

ハワード・ゴットリーブ資料研究センター、ボストン大学（マサチューセッツ州ボストン）

国立公文書館(メリーランド州カレッジパーク)

ニールス・ボーア図書館・アーカイブス（メリーランド州カレッジパーク）

レンセラー工科大学文書館（ニューヨーク州トロイ）

ノルウェー

ノルウェー・レジスタンス博物館（オスロ）

ノルウェー科学技術大学図書館（トロンハイム）

ノルウェー産業労働者博物館（ヴェモルク）

ドイツ

連邦公文書館（ベルリン）

連邦公文書館（フライブルク）

ドイツ博物館文書館（ミュンヘン）

イギリス

ブリティッシュ・オンライン・アーカイブス（ウェイクフィールド）

帝国戦争博物館（ロンドン）

国立公文書館（キュー）

フランス

国立中央文書館（パリ）

私文書

ライフ・トロンスター（ライフ・トロンスター・ジュニア提供）

クヌート・ハウグラン（トロン、トールフィン、トーリル・ハウグラン提供）

アイナル・シンナルラン（マリエッレ、ヒルヴィール・シンナルラン提供）

イェンス＝アントン・ポウルソン（ミーア、ウンニ・ポウルソン提供）

クヌート・ハウケリ（ビョルグルフ、ヒルヴィール、クヌート・ハウケリ提供）

デイヴィッド・アーヴィング（ブリティッシュ・オンライン・アーカイブス提供）

ロルフ・スールリー（フィン・スールリー提供）

ビョルン・イヴァルセン

インタビュー

トロンスターの家族 (オスロ)
ハウグランの家族 (オスロ、リューカン)
ハウケリの家族 (オスロ)
ポウルソンの家族 (オスロ)
シンナルランの家族 (オスロ、リューカン、アメリカ合衆国)
フィン・スールリー (オスロ)
ラグナル・ウルスタイン (アメリカ合衆国)
スヴァイン・ヴェトレ・トラエ (オスロ)
リリアン・ガブルエルソン (オスロ)

ノルウェー語およびドイツ語の書籍・論文・記事

Andersen, Ketil. *Hydros historie 1905–1945*. Bind 1, *Flaggskip i fremmed eie: Hydro 1905–1945*. Oslo: Pax Forlag, 2005.

Bagge, Erich, Kurt Diebner, and Kenneth Jay. *Von der Uranspaltung bis Calder Hall*. Hamburg: Rowohlt, 1957.

Berg, John. *Soldaten som ikke ville gi seg: Lingekaren Arne Kjelstrup, 1940–45*. Oslo: Metope, 1986.

Bergfald, Odd. *Hellmuth Reinhard: Soldat eller morder?* Oslo: Schibsted, 1967.

Bøhn, Per. *IMI: Norsk innsats i kampen om atomkraften*. Trondheim: F. Bruns Bokhandels Forlag, 1946.

Brauteset, Steinar. *Gestapo-offiseren Fehmer: Milorgs farligste fiende*. Oslo: Cappelen, 1986.

Brun, Jomar. *Brennpunkt Vemork, 1940–1945*. Oslo: Universitetsforlaget, 1985.

Dahl, Helge. *Rjukan*. Bind 2, *Fra 1920 til 1980*. Rjukan: Tinn kommune, 1983.

Drew, Ion et al. *Tause helter: Operasjon Freshman og andre falne*. Stavanger, Rogaland, Norway: Hertervig Akademisk, 2011.

Fjeldbu, Sigmund. *Et lite sted på verdenskartet — Rjukan 1940–1950*. Oslo: Tiden, 1980.

Gestapo i Norge: Mennene, midlene og metodene. Oslo: Norsk kunstforlag, 1946.

Halvorsen, Odd. *Den Norske Turistforening årbok 1947*. Oslo: Den Norske Turistforening, 1947.

———. *Den Norske Turistforening årbok 1970*. Oslo: Den Norske Turistforening, 1970.

Hurum, Gerd Vold. *En Kvinne ved navn “Truls”: Fra motstandskamp til Kon-Tiki*. Oslo: Wings, 2006.

Jensen, Erling. *Kompani Linge*. Bind 1. Oslo: Gyldendal, 1949.

Karlsch, Rainer. *Hitlers Bombe: Die geheime Geschichte der deutschen Kernwaffenversuche*. Munich: Deutsche Verlags-Anstalt, 2005.

Kjelstadli, Sverre. *Hjemmestyrkene*. Oslo: Bokstav & Bilde, 1959.

Larsen, Stein, Beatrice Sandberg, and Volker Dahm, eds. *Meldungen aus Norwegen, 1940–1945: Die geheimen Lageberichte des Befehlsabers der Sicherheitspolizei und des SD in Norwegen*. Munich: R. Oldenbourg Verlag, 2008.

- Lauritzen, Per. *Claus Helberg: Veiviser i krig og fred*. Oslo: Den Norske Turistforening, 1999.
- Løken, Roar. "Militær motstand i Milorgs D. 16, 1940–1945." PhD diss., Universitet i Oslo, 1976.
- Lunde, Kjell Harald. *Sabotøren: Et portrett av mennesket og krigshelten Fredrik Kayser*. Bergen, Norway: Alma Mater, 1997.
- Myklebust, Gunnar. *Tungtvannssabotøren: Joachim H. Rønneberg, Linge-kar og fjellmann*. Oslo: Aschehoug, 2011.
- Nagel, Günter. *Atomversuche in Deutschland: Geheime Uranarbeiten in Gottow, Oranienburg, und Stadtilm*. Zella-Mehlis, Germany: Heinrich-Jung-Verlagsgesellschaft, 2002.
- Njølstad, Olav. *Professor Tronstads krig*. Oslo: Aschehoug, 2012.
- Nøkleby, Berit. *Gestapo: Tysk politi i Norge, 1940–45*. Oslo: Aschehoug, 2003.
- . *Josef Terboven: Hitlers mann i Norge*. Oslo: Gyldendal, 1992.
- . "Uforskammet opptreden mot Terboven." *Aftenposten*, February 25, 1983.
- Olsen, Kristofer Anker. *Norsk Hydro gjennom 50 år*. Oslo: Norsk Hydro-Elektrisk Kvælstofaktieselskab, 1955.
- Ording, Arne, Johnson Gudrun, and Johan Garder. *Våre falne, 1939–1945, Annen Bok*. Oslo: Grøndahl, 1950.
- Payton, Gary, and Trond Lepperød. *Rjukanbanen: På sporet av et industrieventyr*. Rjukan: Maana Forlag, 1995.
- Piekalkiewicz, Janusz. *Spione, Agenten, Soldaten: Geheime Kommandos im Zweiten Weltkrieg*. Munich: Schweizer Volks-Buchgemeinde, 1969.
- Rostøl, Jack, and Nils Helge Amdal. *Tungtvannssabotør: Kasper Idland, fra krig til kamp*. Sandnes, Rogaland, Norway: Commentum, 2011.
- Sæter, Svein. *Operatøren: Knut Haugland's egen beretning, Tungtvann, Gestapo, Kon-Tiki*. Oslo: Cappelen Damm, 2008.
- Schaaf, Michael. "Der Physikochemiker Paul Harteck." PhD diss., Historisches Institut der Universität Stuttgart, 1999.
- Schramm, Percy. *Hitler als militärischer Führer: Erkenntnisse und Erfahrungen aus dem Kriegstagebuch des Oberkommandoes der Wehrmacht*. Frankfurt am Main: Athenäum Verlag, 1965.
- Skogen, Olav. *Ensom krig mot Gestapo*. Oslo: Aschehoug Pocket, 2009.
- Tranøy, Joar. *Oppvekst i samhold og konflikt*. Oslo: Maana Forlag, 2007.
- Ueland, Asgeir. *Tungtvannssaksjonen: Historien om den største sabotasjeoperasjonen på norsk jord*. Oslo: Gyldendal, 2013.
- Veum, Erik. *Nådeløse nordmenn: Statspolitiet, 1941–1945*. Oslo: Kagge Forlag, 2012.

- Adamson, Hans Christian, and Per Klem. *Blood on the Midnight Sun*. New York: Norton, 1964.
- Baden-Powell, Dorothy. *Operation Jupiter: SOE's Secret War in Norway*. London: Hale, 1982.
- Bailey, Roderick. *Forgotten Voices of the Secret War: An Inside History of Special Operations During the Second World War*. London: Ebury, 2008.
- Bennett, John. *Letters from England*. San Antonio, TX: Hertzog, 1945.
- Berglyd, Jostein. *Operation Freshman: The Hunt for Hitler's Heavy Water*. Stockholm: Leandoer & Ekholm, 2006.
- Bernstein, Jeremy, and David Cassidy. *Hitler's Uranium Club: The Secret Recordings at Farm Hall*. New York: Springer Science & Business Media, 2013.
- Beyerchen, Alan. *Scientists Under Hitler: Politics and the Physics Community in the Third Reich*. New Haven, CT: Yale University Press, 1977. [A・D・バイエルヘン『ヒトラー政権と科学者たち』常石敬一訳、岩波書店]
- Casimir, Hendrik. *Haphazard Reality: Half a Century of Science*. New York: Harper & Row, 1984.
- Cassidy, David C. *Uncertainty: The Life and Science of Werner Heisenberg*. New York: W. H. Freeman, 1992. [デヴィッド・C・キャシディ『不確定性——ハイゼンベルクの科学と生涯』伊藤憲二ほか訳、白揚社]
- Churchill, Winston. *The Churchill War Papers: The Ever-Widening War, 1941*. Ed. Martin Gilbert. New York: Norton, 2001.
- . *The Hinge of Fate*. Vol. 4 of *The Second World War*. Boston: Houghton Mifflin, 1950.
- . *Their Finest Hour*. Vol. 2 of *The Second World War*. New York: Mariner Books, 1978.
- Clark, Ronald. *The Birth of the Bomb*. London: Phoenix House, 1961. [ロナルド・クラーク『原爆の誕生』久世寛信訳、みすず書房]
- . *Tizard*. Cambridge, MA: MIT Press, 1965.
- Compton, Arthur Holly. *Atomic Quest: A Personal Narrative*. Oxford, UK: Oxford University Press, 1956. [アーサー・H・コンプトン『原子の探求』仲晃ほか訳、法政大学出版局]
- Cookridge, E. H. *Set Europe Ablaze: The Inside Story of Special Operations Executive*. New York: Thomas Crowell, 1967.
- Cooper, D. F. "Operation Freshman." *The Royal Engineers Journal*, March 1946.
- Cruikshank, Charles. *SOE in Scandinavia*. Oxford, UK: Oxford University Press, 1986.
- Dahl, Per F. *Heavy Water and the Wartime Race for Nuclear Energy*. Bristol, UK: Institute of Physics Publishing, 1999.
- Dalton, Hugh. *The Fateful Years: Memoirs 1931–45*. London: Frederick Muller, 1957.
- Dank, Milton. *The Glider Gang: An Eyewitness History of World War II Glider Combat*. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1977.
- Dipple, John. *Two Against Hitler: Stealing the Nazis' Best-Kept Secrets*. New York: Praeger, 1992.

- Dorril, Stephen. *MI6: Inside the Covert World of Her Majesty's Secret Intelligence Service*. New York: Free Press, 2002.
- Drummond, John D. *But for These Men*. New York: Award Books, 1962.
- Ermenc, Joseph, ed. *Atomic Bomb Scientists: Memoirs, 1939–45*. Meckler, 1989.
- Fen, Åke. *Nazis in Norway*. London: Penguin Books, 1942.
- Fine, Lenore, and Jesse A. Remington. *The Corps of Engineers: Construction in the United States*. Washington, DC: Office of the Chief of Military History, 1972.
- Foot, M.R.D. *SOE: An Outline History of the Special Operations Executive, 1940–46*. London: Pimlico, 1999.
- Frank, Charles. *Operation Epsilon: The Farm Hall Transcripts*. Oakland: University of California Press, 1993.
- Freeman, Roger A. *The Mighty Eighth War Manual*. London: Jane's, 1985.
- Gallagher, Thomas. *Assault in Norway: Sabotaging the Nazi Nuclear Program*. Guildford, CT: Lyons Press, 1975.
- Gjelsvik, Tore. *Norwegian Resistance, 1940–1945*. Trans. by Thomas Kingston Derry. London: C. Hurst, 1979.
- Goebbels, Josef. *The Goebbels Diaries*. London: H. Hamilton, 1948.
- Goldsmith, Maurice. *Frédéric Joliot-Curie: A Biography*. London: Lawrence and Wishart, 1976.
- Goudsmit, Samuel A. *Alsos*. Woodbury, NY: AIP Press, 1996. [サムエル・A・ハウトスミット『ナチと原爆——アルソス科学情報調査団の報告』山崎和夫・小沼通二訳、海鳴社]
- Gowing, Margaret. *Britain and Atomic Energy, 1939–1945*. London: Macmillan, 1982.
- Groves, Leslie. *Now It Can Be Told: The Story of the Manhattan Project*. New York: Da Capo Press, 1983. [レスリー・R・グローブス『原爆はこうしてつくられた』富永謙吾・実松譲訳、恒文社]
- Haarr, Geirr H. *The German Invasion of Norway: April 1940*. Annapolis, MD: Naval Institute Press, 2009.
- Hargreaves, Richard. *Blitzkrieg Unleashed: The German Invasion of Poland*. Mechanicsburg, PA: Stackpole Books, 2008.
- Hauge, E. O. *Salt-Water Thief*. London: Duckworth, 1958.
- Haukelid, Knut. *Skis Against the Atom*. Minot, ND: North American Heritage Press, 1989.
- Heisenberg, Werner. *Physics and Beyond: Encounters and Conversations*. Translated by Arnold J. Pomerans. New York: Harper & Row, 1971.
- Henniker, Mark. *An Image of War*. London: L. Cooper, 1987.
- . *Memoirs of a Junior Officer*. Edinburgh: Blackwood & Sons, 1951.
- Hentschel, Klaus, ed. *Physics and National Socialism: An Anthology of Primary Sources*. Basel: Birkhäuser Verlag, 1996.
- Herrington, Ian. “The Special Operations Executive in Norway 1940–45,” PhD diss, De Montfort University, 2004.
- Hewins, Ralph. *Quisling: Prophet Without Honor*. London: W. H. Allen, 1965.

- Hinsley, F. H. *British Intelligence in the Second World War*. Vol. 2. Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1981.
- Hitler's Sunken Secret*. PBS Documentary Transcript. November 8, 2005.
- Humble, Richard. *Hitler's Generals*. London: Barker, 1973.
- Ingstad, Helge. *The Land of Feast and Famine*. Translated by Eugene Gay-Tiffit. Montreal: McGill-Queen's University Press, 1992.
- International Military Tribunal. *Trial of Major War Criminals*. Vol. 27. Nuremberg: IMT, 1947.
- Irving, David. *The German Atomic Bomb: The History of Nuclear Research in Nazi Germany*. New York: Perseus Books, 1983.
- Jablonski, Edward. *Double Strike: The Epic Air Raids on Regensburg-Schweinfurt, August 17, 1943*. Garden City, NY: Doubleday, 1974.
- Jeffery, Keith. *The Secret History of MI6*. London: Penguin Press, 2010.
- Johnson, Amanda. *Norway: Her Invasion and Occupation*. Decatur, GA: Bowen Press, 1948.
- Jones, R. V. "Thicker Than Heavy Water," *Chemistry and Industry*, August 26, 1967.
- Jones, Reginald. *The Wizard War: British Scientific Intelligence, 1939–1945*. New York: Coward, McCann & Geoghegan, 1978.
- Jungk, Robert. *Brighter Than a Thousand Suns: A Personal History of the Atomic Scientists*. Translated by James Cleugh. New York: Harcourt Brace, 1958. [R・ユンク 『千の太陽よりも明るく——原爆を造った科学者たち』 菊盛英夫訳、平凡社]
- Knudsen, H. Franklin. *I Was Quisling's Secretary*. London: Britons, 1967.
- Kramish, Arnold. *The Griffin*. London: Macmillan, 1986. [アーノルド・クラミッシュ 『暗号名グリフィン——第二次大戦の最も偉大なスパイ』 新庄哲夫訳、新潮文庫]
- Kurzman, Dan. *Blood and Water: Sabotaging Hitler's Bomb*. New York: Henry Holt, 1997. [ダン・カーズマン 『ナチ原爆破壊工作』 水野谷とおる訳、朝日新聞社]
- Langworth, Richard M., ed. *Churchill by Himself: The Definitive Collection of Quotations*. New York: Public Affairs, 2008.
- Lee, Sabine, ed. *Sir Rudolf Peierls: Selected Private and Scientific Correspondence*. Vol. 1. Singapore: World Scientific, 2009.
- Lynch, Tim. *Silent Skies: Gliders at War 1939–1945*. Barnsley, UK: Pen & Sword, 2008.
- Macrakis, Kristie. *Surviving the Swastika: Scientific Research in Nazi Germany*. New York: Oxford University Press, 1993.
- Mann, Matthew. "British Policy and Strategy Towards Norway, 1941–44." PhD diss., University of London, 1998.
- Marks, Leo. *Between Silk and Cyanide: A Codemaker's War*. New York: Free Press, 1998.
- Meacham, Jon. *Franklin and Winston: An Intimate Portrait of an Epic Friendship*. New York: Random House, 2004.
- Mears, Ray. *The Real Heroes of Telemark: The True Story of the Secret Mission to Stop Hitler's Atomic Bomb*. London: Coronet, 2003.
- Moore, Ruth. *Niels Bohr: The Man, His Science, and the World They Changed*. New York:

- Knopf, 1966. [ルース・ムーア 『ニールス・ボーア——世界を変えた科学者』 藤岡由夫訳、河出書房]
- Moran, Charles McMoran Wilson. *Winston Churchill: The Struggle for Survival, 1940–1965: Taken from the Diaries of Lord Moran*. London: Constable, 1966. [ロード・モーラン 『チャーチル——生存の戦い』 新庄哲夫訳、河出書房]
- Nichols, K. D. *The Road to Trinity*. New York: William Morrow, 1987.
- Njølstad, Olav, et al. *The Race for Norwegian Heavy Water, 1940–1945*. Oslo: Institutt for Forsvarsstudier, 1995.
- O'Connor, Bernard. *Churchill's School for Saboteurs: Station 17*. Gloucestershire, UK: Amberley, 2013.
- Palmstrøm, Finn, and Rolf Torgersen. *Preliminary Report on Germany's Crimes Against Norway*. Oslo: Grøndal & Son, 1945.
- Parton, James. *"Air Force Spoken Here": General Ira Eaker and the Command of the Air*. Bethesda, MD: Adler & Adler, 1986.
- Peierls, Rudolf. *Bird of Passage: Recollections of a Physicist*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2014. [R・パイエルス 『渡り鳥——パイエルスの物理学と家族の遍歴』 松田文夫訳、吉岡書店]
- Perquin, Jean-Louise. *The Clandestine Radio Operators: SOE, BCRA, OSS*. Paris: Histoire and Collections, 2011.
- Persico, Joseph E. *Roosevelt's Secret War: FDR and World War II Espionage*. New York: Random House, 2002.
- Petrow, Richard. *The Bitter Years: The Invasion and Occupation of Denmark and Norway, April 1940–May 1945*. New York: William Morrow, 1974.
- Poulsen, Jens-Anton. *The Heavy Water Raid: The Race for the Atom Bomb 1942–44*. Oslo: Orion Forlag AS, 2009.
- Powers, Thomas. *Heisenberg's War: The Secret History of the German Bomb*. New York: Da Capo Press, 1993. [トマス・パワーズ 『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか——連合国が最も恐れた男・天才ハイゼンベルクの闘い』 上下巻、鈴木主税訳、福武文庫]
- Rhodes, Richard. *The Making of the Atomic Bomb*. New York: Simon & Schuster, 1996. [リチャード・ローズ 『原子爆弾の誕生』 上下巻、神沼二真・渋谷泰一訳、紀伊國屋書店]
- Rigden, Denis. *How to Be a Spy: World War II SOE Training Manual*. Toronto: Dundurn, 2004.
- Riste, Olav, and Berit Nøkleby. *Norway 1940–45: The Resistance Movement*. Oslo: Johan Grundt Tanum Forlag, 1970.
- Roane, Owen. *A Year in the Life of a Cowboy with the Bloody 100th*. The Woodlands, TX: Mackenzie Curtis Publishing, 1995.
- Rose, Paul Lawrence. *Heisenberg and the Nazi Atomic Bomb Project, 1939–1945*. Berkeley: University of California Press, 2002.
- Sagasfos, Ole Johan. *Progress of a Different Nature*. Oslo: Pax Forlag, 2006.
- Sandys, Celia. *Chasing Churchill: Travels with Winston Churchill*. London: HarperCollins,

- 2004.
- Seaman, Mark, ed. *Special Operations Executive: A New Instrument of War*. London: Routledge, 2006.
- Shirer, William. *Berlin Diary: The Journal of a Foreign Correspondent, 1934–1941*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 2002. [ウィリアム・シャイラー『ベルリン日記——1934-40』大久保和郎・大島かおり訳、筑摩書房]
- . *The Rise and Fall of the Third Reich*. New York: Simon & Schuster, 1990. [ウィリアム・L・シャイラー『第三帝国の興亡』全5巻、松浦伶訳、東京創元社]
- Smyth, H. D. *Atomic Energy for Military Purposes*. York, PA: Maple Press, 1945. [H・D・スマイス『原子爆弾の完成——スマイス報告』杉本朝雄・田島英三・川崎榮一訳、岩波書店]
- Speer, Albert. *Inside the Third Reich*. New York: Macmillan, 1981. [アルベルト・シュペーア『第三帝国の神殿にて——ナチス軍需相の証言』上下巻、品田豊治訳、中央公論新社]
- Stafford, David. *Secret Agent: The True Story of the Covert War Against Hitler*. New York: Overlook Press, 2001.
- Suess, Hans. “Virus House: Comments and Reminiscences.” *Bulletin of Atomic Scientists* 24 (June 1968): 36–39.
- Walker, Mark, and Rainer Karlsch. “New Light on Hitler’s Bomb.” *Physics World* 18 (June 2005): 15–18.
- Walker, Mark. *German National Socialism and the Quest for Nuclear Power*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1989.
- . *Nazi Science: Myth, Truth, and the German Atomic Bomb*. New York: Plenum Press, 1995.
- Warbey, William. *Look to Norway*. London: Secker & Warburg, 1945.
- Werner-Hagen, Knut. “Mission ‘Moonlight’ — Norway 1944.” Website of the Austrian Armed Forces, <http://www.bundesheer.at/truppendienst/ausgaben/artikel.php?id=886>, March 2009.
- Wiggan, Richard. *Operation Freshman: The Rjukan Heavy Water Raid, 1942*. London: William Kimber, 1986.
- Wigner, Eugene Paul. *The Collected Works*. New York: Springer Science and Business Media, 2001.
- Williams, Robert Chadwell. *Klaus Fuchs, Atom Spy*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1987.
- Wilson, John Skinnar. *Memoirs of a Varied Life*. London: Imperial War Museum, John Skinner Wilson Collection, unpublished.
- Worm-Müller, Jacob. *Norway Revolts Against the Nazis*. London: Lindsay Drummond, 1941.
- Wright, Myrtle. *Norwegian Diary, 1940–1945*. London: Friends Peace and International Relations Committee, 1974.